

VIEW21

〈ビュー21〉
高校版
Volume 3

2016
August

8月

分かち合おう 育てたい生徒像

特集

全教師で踏み出す 「カリキュラム・ マネジメント」 実現の第一歩

授業を進化！ 思考を深化！
実践 **アクティブ・ラーニング**

化学

長崎県・私立純心中学校・純心女子高校
樋本六秀

指導変革の軌跡

群馬県立
桐生高校

愛媛県・私立
聖カタリナ学園高校

次代の教育を形づくる教委の一手
神奈川県

ベネッセ教育総合研究所

ハートを
こがせ!

Vol.09

部員全員で
2日間かけて仕込んだ
花御膳 200食が
3時間で完売!

①

① 開店と同時に店内は満席となり、厨房は大忙し。エビの天ぷら、野菜の天ぷら、卵焼きと、各担当者がてきぱきと調理し、盛りつけ係に渡す。② 火で温め続けているみそ汁が煮詰まっていないか、味をチェック。③ 一番人気の花御膳。天ぷら、白あえ、野菜の炊き合わせ、松阪牛しぐれ煮のせの卵焼きなど、盛りだくさん。

②



③

④

④ メインのお膳を出してから、時間を空けずにご飯や小鉢を出せるよう、配膳と厨房の連携を心がける。

お客様が「おいしい」と感じて、
また来てくれるよう、
全力を尽くす

三重県多気町の五桂池ふるさと村にある「まごの店」は、三重県立相可高校の食物調理科の生徒たちが運営するレストランだ。営業日は土・日・祝日のみだが、三重県産の食材を生かした料理が好評で、開店前から行列ができる。

オープンした2002年。当初は屋台だったが、生徒の働きぶりと手作り料理の評判の人気店になったため、多気町が地域活性化の目玉の1つにしようと、05年、レストランを新築した。それから11年、店は料理人を目指す子どもたちの憧れの場だ。入学してしばらくは店で立ち尽くしている1年生も、先生や上級生にもまれながら、やがて料理人らしくなっていく。

いつも笑顔で元気よく！
真心を込めておもてなし

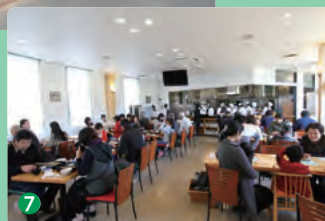
⑤

⑤ お客様が伝票を持って席を立つと、すかさずレジに向かう会計係の生徒。「ありがとうございます」と、笑顔でお客様を見ながら、お釣りを両手で渡す。

⑥⑦ 建物の設計・デザインは、三重県の工業高校の生徒から案を募り、コンペで決めた。外壁の絵は多気町の小学生が描いたもの。「まごの店」には、地域の子どもの夢も詰まっている。



⑥



⑦

2 特集

全教師で踏み出す 「カリキュラム・マネジメント」 実現の第一歩

4 インタビュー 〓カリ・マネ〓で学校をチーム化し、教育目標のよりよい達成を目指す

岐阜大学大学院教育学研究科 准教授 田村知子

8 座談会

教育目標の策定や共有に校長や教師はどう取り組むか

校長
座談会

教育目標をどう立て学校を運営していくか

北海道清水高校 校長 西嶋潤一

東京都・私立鷗友学園女子中学高校 校長 吉野 明

神奈川県立湘南高校 校長 稲垣一郎

現場リーダー
座談会

課題や目標の共有を教師間でいかに図るか

北海道札幌平岸高校 進路指導部長 高松洋司

東京都・私立三田国際学園中学校・高校 学習指導部長 田中 潤

大阪府立西野田工科高校 1学年主任 寺岡俊介

16 実践事例1

生徒の実態把握から教育目標を設定し、「学び直し」を教育課程に位置づける

北海道北広島西高校

20 実践事例2

共学化を機に基本理念を策定し、教育活動を改善し続ける

大阪府・私立高槻中学校・高校

24 ハートをこがせ！

三重県立相可高校^{おうか} 高校生レストラン「まごの店」先輩とお客様に鍛えられ、目指すは一流の料理人！

26 授業を進化！ 思考を深化！ 実践 アクティブ・ラーニング

学び合い、支え合う協働学習と気づきを促す問いかけで、
批判的思考力を高める化学◎長崎県・私立純心中学校・純心女子高校 植本六秀^{むつひで}

30 指導変革の軌跡

群馬県立桐生高校^{きりゅう}

進路意識向上◎1年生からの進路意識醸成、模試結果の徹底分析で高い志を持たせる

愛媛県・私立聖カタリナ学園高校

学校改革◎学校の一体感を醸成し、学び直しと ICT 活用で教育力を高める

38 改良！ 指導ツール ビフォーアフター

行事振り返りシート

42 大学Evolution 大学が拓く新しい学び

地域と協働しながら、

地域再生・地方創生に貢献できる知識・技能・意欲を育む

千葉大学◎コミュニティ再生ケア学、地域産業イノベーション学

46 次代の教育を形づくる教委の一手

神奈川県

生徒に主体的な学習を促して英語4技能を育成し、グローバル社会を生きる礎を築く

56 Reader's VIEW

〈ビュー21〉
高校版
Volume 32016
August

8 月

今月の表紙メッセージ

分かち合おう 育てたい生徒像

◎今号の特集テーマ「カリキュラム・マネジメント」においてまずすべきことは、学校の教育目標の明確化とその共有、すなわち、自校でどのような生徒を育てたいのかを学校全体で考えることです。夢(=育てたい生徒像)は、知識や経験がなければ語れないものではありません。教科や分掌、年齢などの違いを超えて、全教師が「こんな生徒を育てたい!」を分かち合う時、学校は1つとなり、カリキュラム・マネジメントの実現への大きな一歩が踏み出されるのではないのでしょうか。

『VIEW21』高校版
編集長 柏木崇
<http://berd.benesse.jp> 本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます *本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

全教師で踏み出す 「カリキュラム・ マネジメント」 実現の第一歩

「アクティブ・ラーニング」と並び、次期学習指導要領の大きな柱となる「カリキュラム・マネジメント」の実現のために、学校によつては、カリキュラムを核とした学校全体の構造や教育活動全体の見直しが求められるだろう。もちろん、それを一気に推し進めるのは、決して簡単なことではない。そこで、今号は、今後求められる「カリキュラム・マネジメント」について整理した上で、その実現に向けた第一歩として、学校は、そして教師は、何をすべきなのかを考えていく。

Q. 2016年2月号・特集「有機的に結び付けるこれからの教育活動」についてのご意見・ご感想をお聞かせください。

◎「カリキュラム・マネジメント」を行おうとすると、教育活動のすべてを構築し直すことになる。インフラ整備や予算、人材配置も考えなくてはならず、各論でも、例えば、教科等間の内容事項の相互関連づけでは、それだけでも相当の時間と段取りが必要だ。何から手をつけるのかを見定めないと、部分最適で終わる恐れがある。 (埼玉県)

◎現状では、各行事が単独でのPDCAサイクル（前例踏襲のまま、PDの繰り返しかもしれない）であり、高校から社会に移行する中で、生徒にどのような資質・能力をつけるのが軽視されていたと思う。今回の三位一体の改革がなされる中で、生徒の未来を保証するために、生徒につけたい力を教師間で共有し、「カリキュラム・マネジメント」を確立させることが、喫緊の課題だとよく理解できた。 (大阪府)

◎教育改革を実践する学校としての特徴が鮮明となる特集だった。その特徴とは、第一に目指す生徒像と、それを実現するために必要とする資質・能力といった、学校独自の目標（＝スクール・アイデンティティ）を明確に持つ学校である。次に、そうした目標に向けた学校単位でのコンセンサスの存在である。 (愛知県)

◎「カリキュラム・マネジメント」が確立していなければ、場あたりの学校経営となる。まず、学校の課題を組織全体で共有することが大切だ。その上で教育目標を明確に設定し、その実現に向けてPDCAサイクルを回し続けることが重要だ。実践事例では、各学校とも育みたい力を明確化していた。「どんな生徒を育てたいか」の共通理解を、教師間でどこまで深めるかがポイントだと感じた。 (沖縄県)

出典／『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果より。アンケートは、2016年2月にウェブとファクスで実施。

本号のテーマ

今後求められる「カリキュラム・マネジメント」と、
その実現の第一歩として何をすべきかを考える

今後求められる「カリキュラム・マネジメント」とは？

インタビュー【P.4～7】



岐阜大学
大学院教育学研究科
准教授
田村知子

◎カリキュラム・マネジメントは、カリキュラムを主たる手段として、学校の教育目標をよりよく達成しようとする営み。具体的には、教育目標達成のために計画されたカリキュラムを適切に実施し、生徒が何を学び、何を学ばなかったのかを評価して改善につなげる、効果的・効率的な教育活動を実現する考え方や具体的な方法を校内で検討していく活動。

◎カリキュラム・マネジメントを行う上で配慮すべき要素は、教育目標、カリキュラムを評価・改善するPDCAサイクル、それらを支える学校内の組織構造・文化、学校外の要素としての家庭や地域、教育課程行政など。

◎管理職や現場のリーダーによる導きの下、まずはカリキュラムを題材に目指す生徒像を関連に語り合い、既にできていることを認め、お互いを励まし合うような場をつくることで、学校をチーム化させることが重要。

実現の第一歩としてすべきは、課題と成果を踏まえた
教育目標の明確化と共有を学校全体で行うこと

校長、現場のリーダー、それぞれが果たすべき役割とは？

校長

校長座談会
【P.8～12】



北海道
清水高校
校長
西嶋潤一



東京都・私立
鷗友学園女子中学高校
校長
吉野 明



神奈川県立
湘南高校
校長
稲垣一郎

◎校長には、国の教育政策の動きや自校の現状、学校に対する地域のニーズなどを把握し、それらを踏まえて、学校として進むべき大きな方向性を教師に示すことが求められる。

◎校長は、教師が意見やアイデアを出しやすい雰囲気をつくるとともに、よい意見・アイデアについて「それ、いいね。やろうよ」と後押しをする。そうすることで、学校全体に活力が生まれる。

現場の
リーダー

現場リーダー
座談会
【P.12～15】



北海道
札幌平岸高校
進路指導部長
高松洋司



東京都・私立
三田国際学園中学校・高校
学習指導部長
田中 潤



大阪府立
西野田工科高校
1学年主任
寺岡俊介

◎現場のリーダーには、組織の中の人間関係のバランスを考慮しながら、個々の教師の能力や意欲を効果的に引き出すことが求められる。

◎トップが示したビジョンを現場のリーダーが自分の言葉に翻訳して、メンバーの教師に伝える役割を担うことが求められる。

実践事例1

北海道北広島西高校 【P.16～19】

生徒の実態把握から教育目標を設定し、「学び直し」を教育課程に位置づける

実践事例2

大阪府・私立高槻中学校・高校 【P.20～23】

共学化を機に基本理念を策定し、教育活動を改善し続ける

カリキュラムは 生徒の学びの総体

カリキュラム・マネジメントは、カリキュラムを主たる手段として、学校の教育目標をよりよく達成していくとする営みのことです。ここで言うカリキュラムは、紙に書かれた教育計画だけを指すものではありません。毎年作成する教育課程、日々の授業、校内の組織、さらに生徒が学んだことも含めた概念になります。これまで、日本の学校では「計画は計画」「授業は授業」と分断された状態が起ちがちでした。カリキュラムを「生徒の学びの総体」と捉えると、

カリ・マネで学校をチーム化し、 教育目標のよりよい達成を目指す

岐阜大学大学院教育学研究科 准教授 田村知子

次期学習指導要領に向けて、「アクティブ・ラーニング」とともに学校の全体的な改善を行うための鍵となる重要な概念として位置づけられた「カリキュラム・マネジメント」。カリキュラム・マネジメントが求められる背景やその実践のポイントについて、岐阜大学大学院教育学研究科の田村知子准教授に聞いた。

カリキュラム・マネジメントは教育目標を達成するために計画されたカリキュラムを適切に実施し、生徒が何を学び、何を学ばなかったのかを評価して改善につなげていく、効果的・効率的な教育活動を実現する考え方、具体的な手法を校内で検討していく活動とも言えます。

カリキュラム・マネジメントを行う上で配慮すべき要素は、教育目標、カリキュラムを評価・改善するPDCAサイクル、それらを支える学校内の組織構造・文化、さらに学校外の要素として家庭や地域、教育課程行政などに整理されます（図1・2参照）。管理職やミドルリーダーが中心

になって、これらの要素をトータルにマネジメントし、教育目標のよりよい実現を目指すことになります。

カリキュラム・マネジメントと

いう概念が日本で生まれたのは、1999年前後、総合的な学習の時間の導入を機に、各校が自校に見合ったカリキュラムを校内で一から



たむら・ともこ◎中村学園大学准教授を経て、2014年より現職。専門は、カリキュラム研究、学校経営。中央教育審議会「チームとしての学校・教職員の在り方に関する作業部会」専門委員。著書に『カリキュラムマネジメントー学力向上へのアクションプラン』（日本標準）など。

図1 カリキュラム・マネジメントの3つの側面

1 教科横断的な視点

各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していく

2 PDCAサイクルの確立

教育内容の質の向上に向けて、子どもたちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立する

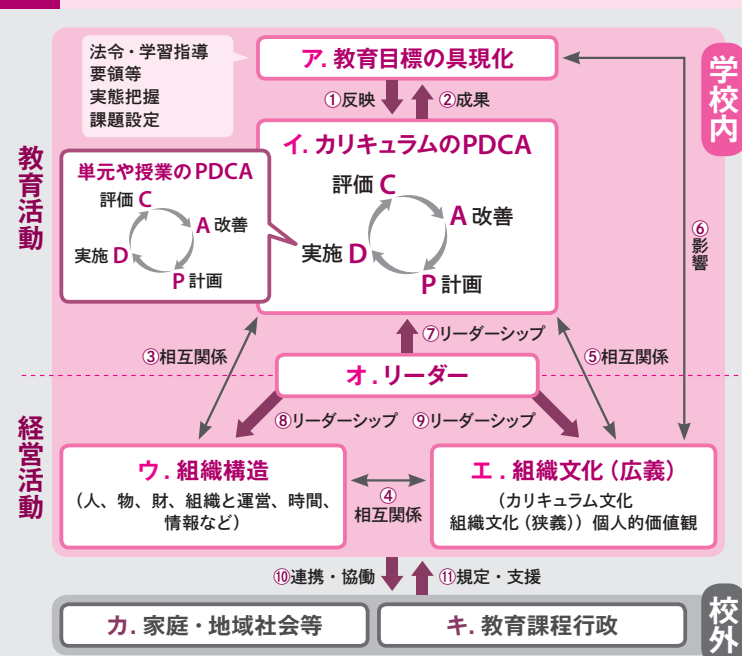
3 人的・物的資源の効果的な組み合わせ

教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせる

*中央教育審議会 教育課程企画特別部会 論点整理（2015年8月公表）を基に編集部が作成

考える必要が出てきた頃です。その後、高校では、総合的な学習の時間の指導要領解説書が2009年に出されましたが、そこには、総合的な学習の時間を展開するために必要な要素として、学校としての教育目標、学習内容と評価方法、組織体制、外部との連携などが挙げられています。まさに、カリキュラム・マネジメントの1つの教科書と言えるものです。また近年、言語活動の充実やキャリア教育における教科横断的な取り組みが求められるようになると、カリキュラム・マネジメントの考え

図2 カリキュラム・マネジメントのモデル図



*田村知子准教授作成の「カリキュラムマネジメント・モデル」

●カリキュラム・マネジメントの要素

ア. 教育目標の具現化 「目指す生徒像」「つけたい力」を、全教職員、生徒、保護者、地域等の関係者はどのような言葉で明確化しているか。

イ. カリキュラムのPDCA 目標を具現化するため、カリキュラムを見直し、よりよいものへと発展させるプロセスはどのような活動で構成されているか。なお、学校では毎年度一からカリキュラムを計画するのではなく、前年度までのカリキュラムを評価し、それを踏まえた計画とすることから、田村准教授は、評価から始める「CAPDサイクル」を提案している。

ウ. 組織構造 カリキュラムを実際につくり動かす「人（人材育成を含む）」、「物（時間や情報を含む）」、「財」、「組織と運営」などは現状においてどのように機能しているか。

エ. 組織文化 教職員が共有している「組織文化」、生徒が共有している「生徒文化」、学校に定着した「校風文化」はそれぞれどんな特徴や強みがあるか。

オ. リーダー 一人ひとりの教師が、学校としての目標やカリキュラムを十分に理解し納得した上で、主体的・自律的に実践に取り組めるように、校長や副校長、教頭、教務主任、研究主任などは、どのようなマネジメントを行っているか。

カ. 家庭・地域社会等 保護者や地域社会、企業といった外部関係者からはどのような協力・支援が得られているか。逆に、外部関係者にどのような協力・支援ができていますか。

キ. 教育課程行政 文部科学省や教育委員会、教育センターからの支援、規制、連携はどのようなものがあるか。どのような支援・連携が必要か。

が一層重要視されてきました。さらに、次期学習指導要領における学力観が、これまでのコンテンツ・ベース（内容重視）にコンピテンシー・ベース（資質・能力重視）が加わり、それにふさわしい学習指導要領が議論される中で、カリキュラム・マネジメントの必要性がより明確に指摘さ

れるようになりました。コンピテンシー・ベースの教育では、教科書の中の精選された知識を構造的に理解することにより、それを使って、何ができるようになるかが問われるようになります。ただ教科書の内容を教えるのではなく、自校の生徒に何が必要なのかを明らかにして、それ

を「教科書で教える」ようになるため、学習の道筋の設計・評価などの面でそれぞれの学校、教師に委ねられる部分が増え、おのずとカリキュラム・マネジメントが求められるようになってきたのです。多様で複雑な社会に対応する力や、高次の思考力を生徒に育成すること

が求められる中で、現場の教師は日々の校務に追われ、学校の活動の精選や有機的な連関が課題になっていきます。アクティブ・ラーニングやICTといった新しい授業形態・指導ツールの導入に、同僚性を発揮しながらともにチャレンジしていく教師集団の形成、組織文化の醸成も必要です。つまり、教師が教科や分掌の枠を超えてつながり、学び合い、支援し合うような学校づくりが求められているのです。

まずは現状把握とこれまでのカリキュラムの評価を行う

カリキュラム・マネジメントは次のようなステップで行います。

①現状把握とこれまでのカリキュラムの評価から、課題を明確化する

まず、目標と実態のギャップを明らかにし、そのギャップの要因を探っていきます。学力調査の結果や学校評価にかかわるアンケート、教師の日々の実践の記録や話し合いの中で得られた振り返りなど、様々な角度から生徒、学校の実態を把握し、それらから課題を明らかにして、校内で共有します。

②課題だけでなく、これまでの成果も共有する

課題や危機意識を共有することは、その後の実践のモチベーションになります。課題や危機意識を共有するだけでは不安になってしまいますから、うまくいったところを認め合い、それを広げたり継承したりすることも大切です。研究授業などで気がついたよい点を学年や教科を超えて指摘し合うようにすると、教師間で肯定的な感情が共有でき、信頼関係の構築につながります。

③課題と成果を踏まえて教育目標を検討する

生徒や学校の実態、変化する社会の動きを踏まえて教育目標を検討します。結果的に前年度と同じ目標になるかもしれませんが、それでも教師全員が目標の意味、目指す生徒の具体像を確認することは大切です。

教育目標は、単に校内に周知・共有するだけでなく、教師一人ひとりが自分の言葉でそれを語れるようになり、生徒が自らの目標としてそれを言うようになることが理想です。そうすることで、目標を意識して生徒、

教師が授業をつくることができるからです。そのため、教育目標の検討は、管理職だけで行うのではなく、生徒も含めた学校組織の全員の声を吸い上げる場をつくるのが大切になります。

教育目標を検討する際、校訓を基に話し合うこともできます。校訓がつくられた当時の関係者の思いや時代背景をひも解きながら、今の時代を生きる教師、生徒が校訓の意味を捉え直すことに価値があります。

④教育目標を達成するための手立てを検討し、共有する

「こうすれば課題が解決でき、教育目標を達成できる」という見通しが立てられるような手立てを検討し、共有します。授業の組み立て方、板書のルールやノートの取り方、さらにはアクティブ・ラーニングの実践など、教科の違いにとらわれない学校としての指導のモデルを、教育目標を念頭に話し合い、共有していきます。教育目標の中で「知識を活用する力の育成」がうたわれていれば、アクティブ・ラーニングや探究学習はその手立ての1つとして積極的に取り組むことになるでしょうし、数

学で学んだ知識を生物の授業で生かすといった場面をつくろうとする教師間の連携が生まれます。

言うまでもなく、モデルはツールの1つに過ぎず、特定の型にあてはめた実践はお勧めしません。しかし、学校としての指導の共通項を話し合う中で、教師がキャリアの違いを生かしながら互いの指導スキルを高め合うことができるでしょう。

⑤目標・内容・方法上のつながりを意識して実践する

教科・領域間、学年間で学習内容の関連を明らかにすることで、限られた時間の中での実践を効果的・効率的にすることができます。教科・学年を超えて教師が年間指導計画やシラバスを手に集まり、教育目標や育てたい力を確認した上で、「この時期にこの活動を行う意味は何か」「この活動にこれだけの時間をかける理由は何か」を検討していきます。そうすることで、目的が曖昧なまま続けられていた活動が明らかにになり、すし、教科・領域を横断した関連性を考慮することで、単元の時数を調整したり、指導の順序を入れ替えた方

できます。

その際、総合的な学習の時間やキャリア教育、探究学習などの課題解決型の授業を中心に、すべての教科の年間指導計画を1枚の用紙にまとめ、各教科の教師が教科書を横に置いて話し合えば、学校の教育課程全体でどんな人材を育てようとしているのか、よりイメージがしやすく、それぞれの教科と課題解決型の授業との連携も容易になります。それはまさに、高い専門性を備えた高校教師としてのカリキュラム・マネジメントへの参画の1つの形です。

⑥実践しながら評価・改善する

日々の授業、そして生徒の学びの総体としてのカリキュラムを改善・発展させるためには、目指す生徒像と照らし合わせた評価が重要です。

一般的には、カリキュラム評価は年度末に行われることが多いのですが、その場合、日々の授業や行事における成果や課題の詳細を忘れてしまいがちです。そこで、1年間のカリキュラム表に、気づいたことや生徒の実態に合わせて変更したことを

どを都度書き込むようにします。そうして修正を加えられた実践が、その年度のカリキュラムの最終形であり、次年度のカリキュラムの土台となるわけです。

コミュニケーションを重ねてチームになる

カリキュラム・マネジメントは1年を通して継続的に、学校全体で協働的に行うものです。それ故、敷居が高いと感じる先生もいらつしやるかもしれません。私は、まずは先生同士で、育てたい生徒像について語り合ってみることをお勧めします。

生徒の学力面で課題を抱えていたA高校のカリキュラム・マネジメントをお手伝いしたことがあります。授業改善が喫緊の課題だと誰もが理解していましたが、どのような視点で授業を改善すればいいのか、先生方の間で共通認識が持てていない状態でした。

そこで、先生方が生徒にどんな力をつけて卒業させたいのかを話し合っていたとき、最終的にA高校と

して21の目標をつくったのです。目標は、例えば「一般紙の新聞を読むことができる」「人に挨拶できる」といったとても具体的なものです。目標が明確化したことで、先生たちは「自分の1年間の授業の中で、21の目標の1つでも2つでも実現できるものはないだろうか」「目標を実現できる授業はどのようなものか」と、授業改善について具体的に考えられるようになりました。その結果、自身の授業の設計だけでなく、ほかの教科の授業を研究し、評価する視点を持てるようになりました。

生徒の声に耳を傾ける場をつくることも重要です。進学に力を入れるB高校では、探究学習について生徒に意見を求めたところ、生徒から「先生は空欄補充型のプリントをよくくれるけれど、私たちは自由に考え、書ける、白い紙がほしい」といった、より主体的な学習を望む声が上がりました。しかし、さらに話し合いを続けるうちに、生徒から「自分たちに任せてほしいと言ってくれど、実際にそういう授業になると、サボる生

徒もいるのではないか」「主体的に学習する雰囲気を、自分たちでつくる仕組みが必要だ」といった自分自身を見つめる言葉がたくさん生まれました。このように、学校改革、カリキュラム・マネジメントの土台は、生徒との話し合いの中からも生まれます。

カリキュラム・マネジメントを進める上で、教師、生徒、さらには地域の人々とのコミュニケーションは欠かせません。見方を変えれば、教育目標を始めたとするカリキュラムは、学校内外のコミュニケーションを活性化させるツールにもなりえるということです。

管理職やミドルリーダーによる導きの下、カリキュラムを題材に目指す生徒像を闊達に語り合い、既にできていることを認め、お互いを励まし合うような場をつくることで、学校はチーム化していきます。何もかも一度に、100点を目指して始めなくてもよいのです。できることから一歩ずつ、まずは「こんな学校にしたい」と話し合うことから始めてみてください。

1
校長
座談会

教育目標をどう立て 学校を運営していくか

人を求心力にするのではなく
理念を求心力にする

——カリキュラム・マネジメントにおいてはず、学校教育目標の策定や共有を学校全体で行うことが求められます。先生方の学校では、それらをどんな点に留意しながら進めていますか。

教育目標の策定や共有に 校長や教師はどう取り組むか

カリキュラム・マネジメントの実現においては、学校教育目標や教育ビジョンの策定や見直し、共有を学校全体で行うことがその第一歩となる。教育目標の策定、見直し、共有のために、校長や現場のリーダーが果たすべき役割は何か。校長と現場リーダーがそれぞれ集まり、語った。

吉野

本校は私立ですが、校長は数年単位で交代する体制になっています。校長が代わる度に教育目標が変わると、学校としての一貫性がなくなり、教師や生徒も混乱します。そこで本校は、常に創立以来の建学の理念に沿って、学校のあるべき姿を考えるようにしています。校長という「人」を求心力にして教育目

標を立てるのではなく、「理念」を求心力にして教育目標を立てることで、トップは代わっても、学校は変わらずにあり続けることができます。

本校は1935（昭和10）年の創立以来、学習者中心主義を掲げてきました。学習者中心主義の考え方は、時代を経ても少しも古びておらず、むしろ多くの人がその重要性を認識するようになっていきます。ですから、学習者中心主義に沿ってどんな教育目標を立てるべきか、どういったカリキュラムを展開するべきかを、学校としてぶれることなく考えていくことができます。

稲垣

私が校長を務めている神奈川県立湘南高校も、旧制中学校以来の100年近い歴史のある伝統校です。創立当初から智育、徳育、体育の三育を掲げた文武両道の学校で、今もその考え方を受け継いでいて、教師や生徒の間にすっかり文化として根づいています。ですから、吉野先生の学校と同じで、教育目標を策定する時も、創立以来の学校独自の理念や文化に沿って考えればよいわけです。そういった意味では、教育目標を立てやすい学校であると言えます。ただし高校は、建学の精神が明確な私立や、公立の伝統校ばかりでは

ありません。特に、生徒数の急増期に新設された高校の場合は、学校の理念に立ち戻って教育目標を立てようにも、理念が現状とそぐわないものになっているケースも少なくありません。そういった高校の校長の中には、理念をどう再構築し、教育目標を策定していけばよいか、苦慮しておられる方も少なくないと思います。



北海道清水高校
校長
西嶋潤一
にしじま・じゅんいち
教職歴38年。同校に赴任して2年目。

自校の現状や地域のニーズを把握する

西嶋 そうですね。そうした高校の場合は、校長が学校の現状や学校に対する地域のニーズをしつかりつかんだ上で、それらを基に理念の再構築や教育目標の策定に取り組むことが必要だと思います。

私が本校に赴任したのは昨春です



東京都・私立
鷗友学園女子中学校
校長
吉野明
よしの・あきら
教職歴42年。同校に赴任して43年目。

東京都・私立鷗友学園女子中学校

- ◎創立以来、キリスト教の精神を基盤に「慈愛（あい）と誠実（まこと）と創造」を校訓として心の教育を行う。
- ◎設立 1935（昭和10）年
- ◎形態 全日制／普通科／女子校
- ◎生徒数 1学年約240人
- ◎2016年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、千葉大、東京大、東京工業大、一橋大、京大、大阪大、九州大などに65人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、東京女子大、東京理科大、日本女子大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ772人が合格。
- ◎URL <https://www.ohyu.jp/>

が、赴任と同時に着手したのも、学校内外についての現状の把握でした。

本校は、北海道の清水町という人口1万人ほどの小さな町にあります。約20年前に普通科と酪農科を統合して総合学科に転換したのですが、地域の過疎化や少子化が進行する中で、近年では総合学科160人の定員を満たすことさえ難しくなっています。生徒の確保が大きな課題なのです。



神奈川県立湘南高校
校長
穂垣一郎
いながき・いちろう
教職歴32年。同校に赴任して1年目。

神奈川県立湘南高校

- ◎創立以来、「日本の学校」を目標に学校経営に取り組み、「智・徳・体・三育の調和的発達」「文武両道」の校風を確立。
- ◎設立 1920（大正9）年
- ◎形態 全日制・定時制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約360人
- ◎2016年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、東京工業大、一橋大、横浜国立大、京都大、大阪大、首都大学東京、横浜市立大などに112人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ607人が合格。
- ◎URL <http://www.shonan-h-pref.kanagawa.ed.jp/>

そのような状況を打開するためには、地域の方々に「子どもを通わせたい」と思われる魅力的な高校に生まれ変わる必要があります。そこで、私は積極的に地域に出て、本校に対する要望に耳を傾けました。すると、「地元の高校に子どもを通わせても、志望する大学に行けるように、もっと進路指導に力を入れてほしい」といった声が多く聞かれたのです。

一方で本校の教師が、自校の現状に対してどんな問題意識を抱いているのかについても把握するようにしました。するとやはり彼らも、「進学実績を何とかしたい」と考えていることが分かりました。本校の総合学科の中には、農業や福祉、ビジネスに関する系列とともに、普通科に該当する系列も設置されていますが、その系列の生徒への対応が手薄になっていることを課題として捉えている教師が多かったのです。

本校の場合は、そのようにして地域のニーズや教師の課題意識を把握した上で、「生徒たちが希望する進路を保障できる学校になること」を教



「校長は自校の現状や地域のニーズを把握した上でビジョンを示す」

北海道清水高校 校長 西嶋潤一

育目標に掲げることになりました。

稲垣 私も、新しい高校に赴任した校長は、いきなり教育目標の設定や学校改革に着手するのではなく、まずは現状を把握することから始める必要があると思います。自校の生徒の学習や行事、部活への取り組み姿勢、教師の学校に対する思いや職員室の雰囲気、保護者の不満や要望、学校に対する地域の評価やニーズなどを、よく観察して把握することで、有効な打ち手を講じることが可能になります。そのためには、生徒の学力や生活状況などをデータ化する体制を校内に構築するとともに、そのデータをしっかりと分析するスキルを教師に育成することが重要です。

もう1つ大切なことは、たとえ赴任した高校が様々な課題を抱えていたとしても、現状を全面否定するの

ではなく、優れた部分やできていることについてもしっかりと認め、肯定することです。そして、優れた部分を残しながら、変えるべき部分を変えたり、できていないことをできるようにしたりするといったスタンスで臨むのが、最もスムーズに学校を変革することにつながります。

吉野 同感です。実は本校も30年ほど前に、抜本的な学校改革を行ったことがありました。学力や生活態度に問題を抱える生徒が増えて学校が荒れた時期があり、状況を改善する必要に迫られたのです。

そこで当時の校長が行ったのが、教科や分掌ごとに教師を校長室に集めて、「あなたはこの教科や分掌で、生徒のためにこれまでどんなことに取り組んできましたか」と問いかけることでした。そして、一人ひとり

の教師の優れた実践を拾い上げて、それらを教科や分掌、さらには学校全体の取り組みとして共有しました。その学校が持っている長所や強みは、一人ひとりの教師や、教科・分掌が長年取り組んできたことの中に潜んでいることが少なくありません。校長には、そうした個々の長所や強みを把握し、上手に引き出して、学校全体の長所や強みにまで広げていくことが求められるのだと思います。

学校として進むべき大きな方向性を教師に示す

西嶋 私は、「本校はこれからこうなるべきだ。そのためにはこれが必要なのだ」と旗を立て、強烈なリーダーシップを発揮して、教師をぐいぐい引っ張るカリスマ校長が悪いとは思いません。ただ、現実には最近、カ

リスマ校長は少なくなっています。

自分がカリスマ校長ではないとすれば、どんな校長像を目指せばいいのか。私は、これからの校長には、国の教育政策の動きや、その中で自校が置かれているポジションを、教師に提示していく役割がますます求められるようになって考えています。そして、国の動きや自校の状況を踏まえて、「本校はどうするべきか」については、教師一人ひとりに考えさせるのです。事実私は、そうしたスタンスで校長職に臨んでいます。

そうすると、教師からいろいろなアイデアが出てくるようになります。本校では、「ドリームチャレンジ宣言」と銘打って、来年度から大学進学などの高い学力が必要な進路に対応するクラスを総合学科の習熟度別授業の中で工夫することにしたのですが、



「個々の教師の長所を学校全体の長所へと広げるのが校長の役割」

東京都・私立鷗友学園女子中学校 校長

吉野 明

それは教師の発案によるものです。文字通り、宣言してしまうと、校長が代わっても取り組みは続けざるを得なくなります。そういった状況を教師自身がつくり出してくれたのです。

私は自分の方から教師に対して、「これをやりなさい」とは言いません。教育に関係する社会の動きや時代の変化の状況と、進むべき方向性を示すだけです。そして、教師から出てきたアイデアの中でよいものについては、校長はニコニコ笑いながら、「それ、いいね。やろうよ」と後押しする。そうすると、学校全体に活気が出て、物事がうまく進んでいきます。

吉野 私も、本校の教育理念や目指すべき学校像については、私から繰り返し語りかけることで教師への浸透を図っていますが、その理念を具体的に実現していくのは現場の教師だと思っています。

本校では各クラスで3日に一度席替えを行っています。本校は女子校ですが、この年代の女子生徒は、同質性の高い小さな集団を形成しがちで、集団から排除されるといじめに

発展することもあります。そこで、頻繁に席替えをして、いろいろな仲間と接する機会を増やし、お互いの違いや多様性を認め合える関係づくりを目指しています。この3日に一度の席替えの発案をしたのは教師です。「先生方の負担が大きすぎないか?」と心配したのですが、「教師よりも生徒の方が大事です」と返されました。実際、席替えを始めてからは、人間関係のトラブルも減りました。

校長が「こういう学校づくりを目指す」ということを教師にしっかりと明示し、それを共有できていれば、教師から出される提案は、こちらが意図しているものと、さほど大きなズレはないものです。むしろ、自分では思いつかないような優れた提案



が出てくることも多いですね。

稲垣 その際に大切になるのは、教師が提案しやすい雰囲気を作ることが大切です。校長と教師が時間を

つくることです。校長と教師が時間をつくって話せるのは、放課後が中心になります。ですから、例えば、「うちの校長は、放課後に校長室を訪ねれば、いろいろと話を聞いてくれる」といった印象が浸透すれば、教師も気軽に校長室を訪れて、相談や提案をしてくれるようになります。また、職員室での打ち合わせというのは、教室のホームルームと似ていて、生徒がそうであるように、先生方もその日の朝の顔色を見れば、「この先生は何か私に相談したいと思っているな」とか、「一言声をかけた方がよさそうだな」といったことが何となく

「教師にとって 相談しやすい校長で いることが大切」

神奈川県立湘南高校 校長 稲垣 一郎

分かるものです。だから校長は、一人ひとりの教師の様子を日頃からよく観察しておくことも大事です。

横のネットワークを 校長同士でつくっていく

——これから自校で、教育目標を策定し、カリキュラム・マネジメントを進めようとする校長先生に、メッセージをお願いします。

吉野 教育目標を実現しやすい体制をつくるための組織改編も校長の大切な仕事です。本校でも、私の言葉を現場に伝わるよう翻訳したり、現場の声を吸い上げて私に伝えたりしてくれる、学校の要になる部署として、学習指導部と生徒指導部を2本柱とする体制に組織改編しました。

稲垣 公立高校の場合、校長は数年の勤務で次の校長にバトンタッチすることになります。そのため、学校が直面している諸課題について、どれが自分の代で解決するべきものか、どれが次の校長にも引き継ぎ取り組んでもらうべきものかを見極め、次の校長に引き継いでもらう必要がある

るものについては、しっかりと引き継ぎを行うことが求められます。

西嶋 校長は学校運営のすべてに目を通さなくてはいけません、とは言え、進路指導は分かるが生徒指導の経験は少ないというように、得手不得手があるものです。そこで、校長間でアドバイスや情報交換をし合える横のネットワークをつくっておくことをお勧めします。校長は孤かな存在ですから、いろいろと相談できる相手がいるのはとても大切です。



2 現場リーダー 座談会

課題や目標の共有を 教師間でいかに図るか

お互いの思いを 率直に話し合える場をつくる

——カリキュラム・マネジメントを実現する第一歩として、教師間で学校の課題や教育目標を共有することが求められます。現場のリーダーとして、どのような共有の場を、どんな点に留意してつくっていますか。

高松 教育目標の共有のため、本校では、校長からの様々な場面での発信に加えて、2015年度末の教務部主宰の校内研修会で、管理職も含めた全教師が参加してのワークショップを開催しました。私は学校外でワールド・カフェなど様々なワークショップを主宰（コラム参照）しているのですが、それに参加して下さったいた本校の教務部の先生が、「あれと同じようなことをやろう」と提案され、実施することになったのです。

ワークショップでは、4人1組の

グループを随時入れ替えながら、学校が抱えている課題や、どんな教育目標を設定するべきかを議論しました。もちろん、一度話し合ったぐらいいでは具体的な成果が出るわけではありません。しかし、同じ学校にいなながら、これまでほとんど言葉を交わしたことがなかった先生方とも話し、お互いの意見を率直にぶつけ合えたことは有意義だったと思います。フラットな関係の中で自由に意見が言い合えるので、取り組みに対してボトムアップの雰囲気醸成しやすいメリットもあります。

田中 研修をワークショップ型でするのは私も賛成です。研修が上から下への一方向のものと、研修を受ける教師の姿勢は受け身になります。カリキュラム・マネジメントは学校全体で取り組むものですから、教師も主体的に物事を考えられるようになる必要があります。そのためには、

トップがビジョンを示す一方で、現場の教師もどうすれば学校をよくしていけるかを当事者意識を持って考え、それを教師間でぶつけ合える文化をつくるのが大切です。

プロジェクトの成否は メンバー選びが肝となる

寺岡 研修やプロジェクトを行う際に重要なのは、教師が積極的に参加・協力したくなるものにするのだと思います。私は勤務校で基礎学力向上のプロジェクトのリーダー（P.14コラム参照）を務めているのですが、私自身が最も工夫したのは、プロジェクトチームのメンバーの選出でした。本校は専門高校なので、国語・数学・英語の教科担当の教師だけでなく、機械系や電気系などの各系からも1人ずつメンバーに入ってもらうようにしました。メンバーに入らない先生方にも、「自分たちのことをよく理解してくれている先生が参加しているから、プロジェクトの動きがキャッチしやすいし、自分の意見もプロジェクトチームに伝えやすい」と安心してもらうためでした。

学校に限らず、どのような組織で

も、「どんな発信か」以上に、「誰の発信か」が重要な場面があります。プロジェクトチームの人選ではそんなことも配慮しました。

本校では現在、基礎学力向上を目指して、1年生を対象にアクティブ・ラーニングを取り入れた授業を展開しているのですが、そうした取り組みが学校全体で受け入れられているのも、全体に配慮した人選が大きかった



高松洋司

北海道札幌平岸高校
進路指導部長
たかまつ・ようじ
教職歴28年。同校に赴任して8年目。国語科。

北海道札幌平岸高校

- ◎札幌市立の高校。2015年度よりユネスコスクールに加盟。生徒・保護者・教職員が学校の課題などについて話し合う三者会議を開催。
- ◎設立 1980（昭和55）年
- ◎形態 全日制／普通科（普通コース・デザインアートコース）／共学
- ◎生徒数 1学年約320人
- ◎2016年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、小樽商科大、北見工業大、北海道大、北海道教育大、室蘭工業大などに37人が合格。私立大は、札幌学院大、札幌大、藤女子大、北星学園大、北海学園大、北海道科学大などに延べ434人が合格。
- ◎URL <http://www.hiragishi-h.sapporo-c.ed.jp/>

たと考えています。

高松 プロジェクトリーダーを任せられる時、メンバーの選出に関する裁量権が現場のリーダーに与えられると、プロジェクトの運営がよりやりやすくなりますね。

寺岡 「メンバーは自分で選べること」を、リーダーを引き受ける際に校長にお願いし、ありがたいことに理解を得ることができました。教科



田中潤

東京都・私立
三田国際学園中学校・高校
学習指導部長
たなか・じゅん
教職歴12年。同校に赴任して3年目。社会科。

東京都・私立三田国際学園中学校・高校

- ◎2015年度に戸板女子中学校・高校から改称。コミュニケーション能力、ICTリテラシー、サイエンスリテラシー、英語の知識とスキルを土台とした考える力の育成を目指す。
- ◎設立 1902（明治35）年
- ◎形態 全日制／本科コース・スーパーイングリッシュコース・スーパーサイエンスコース／共学
- ◎生徒数 1学年約150人
- ◎2016年度入試合格実績
なし（1期生の卒業は2018年3月）
- ◎URL <http://www.mita-is.ed.jp/>

や系の壁を取っ払い、教師間で思い

や考えを共有できる風通しのよい組織をつくるには、メンバーの選出が最も肝になると考えました。

田中 寺岡先生の話を伺っていて、現場のリーダーには、組織の中の人間関係のバランスを考慮しながら、個々の教師の能力・意欲を効果的に引き出していくヒューマンスキルが求められることを強く感じました。



寺岡俊介

大阪府立
西野田工科高校
1学年主任
てらおか・しゅんすけ
教職歴12年。同校に赴任して13年目。工業科（電気系）。

大阪府立西野田工科高校

- ◎大阪府立職工学校として開校。100余年の歴史を持つ。2014年度より実践的技能養成重点型の工科高校として、資格取得に力を入れている。
- ◎設立 1908（明治41）年
- ◎形態 全日制／機械系・電気系・建築都市工学系・工業デザイン系／共学
- ◎生徒数 1学年約320人
- ◎2016年度進路実績（現役のみ）
4年制大は、大阪学院大、大阪国際大、大阪産業大、関西大、近畿大などに16人が合格。短大、工業高専、専門学校進学32人。就職155人。
- ◎URL <http://www.osaka-c.ed.jp/nishinoda-t/zenhp/nishinoda/>

高松洋司先生の取り組み

教師が学校を超えて相互理解を深める試み

◎学校や教科の枠を超えて、様々な教科の教師（期限付任用教員を含む）や教師志望の学生が自発的に集まり、言語活動やアクティブ・ラーニング、社会とつながる高校教育のあり方など、高校教育を巡る多様な課題について話し合う「これからの高等学校教育を考える会」を主宰。議論はワールド・カフェなど様々な形式で行われ、参加者が互いの意見や考え方に触発されながら、相互理解や問題意識の共有を図る場となっている。参加者の中には、将来現場のリーダーとして学校を担うことを期待されている若手教師が多く、そこで吸収したことを勤務校での実践に生かしている。

私は、勤務校では学習指導部長として校内研修を担当（P.14コラム参照）しているのですが、強く意識しているのは、研修を受ける目的や意義を先生方に自分の言葉で伝えることです。本校では、各分掌の部長が何かを行う際には、教師に対して「トップの指示だから」と言うのはNGになっています。トップの方針に

特集

SPECIAL ISSUE
全教師で踏み出す「カリキュラム・マネジメント」実現の第一歩

寺岡俊介先生の取り組み

学力向上のための校内チームをまとめる

◎寺岡先生が勤務する西野田工科高校では、昨年度1年生を対象にベネッセの「基礎力診断テスト」(*1)を実施したところ、GTZ(*2)がD3の生徒が320人中半数を超えていることが判明。基礎学力向上のためのプロジェクトチームを発足させた。寺岡先生は国語・数学・英語の各教科、機械系、電気系などの各系から1人ずつメンバーを選び、7人の教師が教科や系の枠を超えて、課題の共有と対策を練った。今年度、1年生を対象に週1回2時間続きの授業枠で、数学に特化した基礎学力向上のための授業を実施。そこでも、教科や系の枠を超えて教師が1クラスに3人入り、指導している。

従って実施することは、それをそのまま伝えるのではなく、現場の先生方の目線まで降りていって、納得感のある言葉で伝えるようにしています。そのためには、現場のリーダー同士の目線合わせも大切になりますから、毎週各分掌の部長が集まって運営会議を開いています。

実は本校は一時期、生徒募集で苦勞し、存続の危機に陥ったことがありました。私が当時を知る先生方に

田中潤先生の取り組み

教育目標等の共有化を図る校内研修を担当

◎田中先生が勤務する三田国際学園中学校・高校では、「英語」「コミュニケーション能力」「サイエンスリテラシー」「ICTリテラシー」「考える力」の5つの力を備えた生徒を育てる「世界標準の教育」を標榜している。田中先生は学習指導部長として、学校が掲げる教育目標や具体的な実践方法についての教師間での共有を図るために、全教師を対象とした年3回48時間の研修を担当。研修では、学校側が教師に一方的に知識や情報を伝授するだけではなく、暗黙知になっている個々の教師の優れた知識や技能を、教師全体で形式知として共有化していくことを目指している。

話を聞くと、「個々の教師は、それぞれ皆、懸命に頑張っていた」「ただ、全員がどちらの方向に向いて頑張ればよいか分らなかった」と振り返られます。現場が迷わないように、トップがビジョンを明確に示す必要がありますし、現場のリーダーにはトップが示したビジョンを自分の言葉に翻訳して、先生方に伝える役割を担うことが求められるのだと思います。



次のリーダーを育てるのもリーダーの役割

高松 私は今年で51歳になり、そろそろ教師生活もカウントダウンが始まります。自分で何かをやるうといふよりも、同じ価値観や思いを持った若い人を少しでも増やしていくことに力を注ぎたいと思っています。

今春卒業した学年の主任を私が務めた時には、家庭と仕事の両立に苦慮されている女性の先生にできるだけ学年団に入っていたきました。女性教師の能力をもっと生かしたい、「支え合う」学年団をつくりたいと考えたのです。そして自分は一歩引いて、若手や女性教師に学年運営について積極的に発言してもらうようにしました。次世代のリーダーの育成においては、女性教師の能力

「トップが示した
ビジョンを自分の
言葉に翻訳して伝える」

東京都・私立三田国際学園中学校・高校 田中潤

を生かすことも欠かせない視点です。

田中 私が部長を務めている学習指導部は若い教師が多く、私もまた若手に任せることを大切にしています。

私自身もそうでしたが、仕事を任せられ、いろいろな対立や失敗を経験する中で、人はリーダーとして成長します。ですから私の役割は、普段は若手に自由に動いてもらい、何か問題が生じた時だけ私が出て責任を取るのだと思っています。

寺岡 私も今回のプロジェクトでメンバーに選んだのは、ほとんどが30代の先生方でした。選出の基準はいくつかありましたが、今回は、目の前の事象に対して、自分の考えをしっかりと持ちながらも、いろいろな人の意見にも耳を傾けられる人を候補にしました。目標や課題の共有といった場面では、集団をまとめる資質を

*1 GTZ (学習到達ゾーン) という指標で生徒一人ひとりの基礎学力の定着度と学習力、コミュニケーション特性 (自我同一性) を測る、ベネッセの生活・学習指導用テスト。 *2 学習到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の評価指標。「S1」～「D3」までの15段階があり、基礎力診断テストでは、そのうち「A2」～「D3」で評価される。



「振り返りの視点を大切にし、研修の意義を高めたい」

北海道札幌平岸高校 高松洋司

備えた人を^{ばってき}抜擢することが、次のリーダーを育てる上でも大切です。

リソースを組み合わせ ビジョンを実現する

——カリキュラム・マネジメントを実現する上で、現場のリーダーとして「今後、大切にしていきたい」と考えていることを教えてください。

田中 カリキュラム・マネジメントとは、組木細工だと考えています。すべてを壊して全く新しいものをつくるのではなく、既存のリソースを組木細工のように組み合わせながら、学校のビジョンや教育目標を実現することが求められます。学校が持っている優れたリソースは、一人ひとりの先生方が培ってきた知識やスキ

ル、そして経験です。ですから、減点主義で先生方を評価するのではなく、優れた実践や成果を見つけ出し、それを学校全体で共有しながら、ビジョンの実現に結びつけていくことを大切にしていきたいと思っています。



高松 これから現場のリーダーとしてカリキュラム・マネジメントを主導する若い人を、学校内外を問わず育てていきたいと考えています。た

だ、これまでの取り組みの反省として、やりつ放しになっていた面がありました。アクティブ・ラーニングでは「振り返り」が大切であるとされていますが、それは研修やワークショップも同じです。そこで学んだことを実践にどのように落とし込むことができたか、落とし込めなかったとしたらその原因は何か、といったことを検証する場を持つことで、研修やワークショップをより意味のあるものにしていけると 생각합니다。

寺岡 本校の基礎学力向上の取り組みでは、プロジェクトチームに7人の教師、さらに授業担当者として23人の教師が加わり、計30人の教師で生徒の指導にあたっています。その30人の先生方は、基礎学力向上とい

「当事者として課題にかかわる教師を増やす仕組みが必要」

大阪府立西野田工科高校 寺岡俊介

う学校の課題について、現状をよく把握してくださっています。来年以降もこの取り組みを続けることで、かわる先生を少しずつ増やし、学校が抱える課題に対しての目線合わせを進めていきたいと思っています。当事者としてかわる先生を増やす仕組みをつくることも、学校の課題や進むべき道を教師間で共有するための方策になると考えています。



特集

SPECIAL ISSUE
全教師で踏み出す「カリキュラム・マネジメント」実現の第一歩

生徒の実態把握から教育目標を設定し、「学び直し」を教育課程に位置づける

北海道北広島西高校では、学校経営の重点目標の1つとして「学び直し」を掲げ、教育活動全体の見直し・再編成に取り組んでいる。

学校が置かれている状況をデータやアンケートで客観的に把握した上で、教師が教科や分掌を超えた話し合いを通して一体となり、特色ある教育活動を組織的・協働的に推進している。

育てたい生徒像を 学校全体で語り合う

北海道北広島西高校は、基礎学力不足のため高校での学習に問題を抱える生徒を対象にした取り組みとして、2014年度より「学び直し」を導入している。きっかけは、その前年の13年度、当時の教務部長の発案で、5〜10年先を見据えた学校のあり方を検討する有志のワーキンググループ「将来構想会」が組織されたことだったと、現在の教務部長の徳橋孝之先生は振り返る。

「各教科で基礎学力向上のための

取り組みは行っていました。期待通りの成果を上げているという実感がいま一つ得られていませんでした。育てたい生徒像と教育内容がミスマッチを起こしているのではないかと感じていた時、基礎学力向上の方策について話し合ってみないかと声をかけられたのです」（徳橋先生）

教科、分掌、そしてキャリアを超えて集まった約10人の教師が、ざっくばらんに話し合う中で、いろいろなアイデアが出てきたと大澤允先生は話す。

「どんな生徒を育てたいか、そのために解決すべき課題は何かを、定期

的に集まり、自由に話し合いました。若手の私にとっては、ほかの先生の考え、気持ちが分かって新鮮でしたし、自分の頭の中が整理されるような気がしました。それまで以上に自信を持って教壇に立てるようになったと思います」（大澤先生）

将来構想会の発足から数か月、そこで交わされた意見を、全教師と共有したいという声がメンバーから出始めた。将来構想会に参加していた伊藤先生は当時の様子を語る。

「将来構想会での対話を通して、語り合うことで教師が一丸となれることを実感した私たちは、ほかの先生

とも思いを共有したいと考えるようになりました。そこで、校長を通して学校全体に呼びかけ、コンセンサス会議を実施したのです。それは全教師を10人程度ずつの小グループに分けて、各グループに将来構想会のメンバーが1人ずつファシリテーターとして参加し、先生方の意見を吸い上げるというものです」（伊藤先生）

若手の大澤先生もコンセンサス会議ではファシリテーター役を務めた。目の前にいたのは皆、自分よりも経験豊富な先輩ばかりだった。

「自分にそのような役が務まるのかと不安でした。しかし、話し合い

が進む中で、先輩方が『こうして育てたい生徒像を改めて話し合うことは大切なね』と言ってくれたのです。それまで接点のなかった先生もいらったのですが、垣根が一気になくなっていく、そんな時間でした』（大澤先生）



北海道北広島西高校校長
廣田 定憲 ひろた・さだのり
教職歴33年。同校に赴任して1年目。「春風の中に坐す」



北海道北広島西高校副校長
佐賀 聡 さが・さとし
教職歴28年。同校に赴任して3年目。「泰然自若を心がける」



北海道北広島西高校
伊藤 準 いとう・じゅん
教職歴23年。同校に赴任して10年目。進路指導部長。「長いものには巻かれたふりをする」



北海道北広島西高校
徳橋 孝之 とくはし・たかゆき
教職歴14年。同校に赴任して5年目。教務部長。「不決断は最大の害悪。まずは前進」



北海道北広島西高校
大澤 允 おおさわ・まさと
教職歴14年。同校に赴任して5年目。学力向上推進リーダー。「まずはやってみよう」

有志の将来構想会、そして学校全体でのコンセンサス会議で育てたい生徒像を語り合った結果、学び直しと、そこで得た自己肯定感を基礎としたキャリア教育を2軸とした「学力向上のためのグランドデザイン」がまとめられた（図1）。

「対話の中で出てきた言葉をできる限り生かすことで、教師一人ひとりが自分の思いが盛り込まれていると実感できるものになりました。そうして、全員が共感できる土台ができたことで、その教育目標の実現のために自分たちは何ができるのかと

北海道北広島西高校

- 「志行必成」を校訓とし、学び直しとキャリア教育を軸に、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな身体」のバランスのとれた教育を展開。
- 設立 1983（昭和58）年
- 形態 全日制／普通科／共学
- 生徒数 1学年約290人
- 2016年度入試合格実績（現役のみ）
国立大は、小樽商科大、弘前大に2人が合格。私立大は、北星学園大、北海学園大、法政大、関西大などに延べ65人が合格。短大、専門学校進学124人。就職は、日本郵便株式会社北海道支社、北海道旅客鉄道株式会社、株式会社北海道銀行などに56人。公務員9人。
- URL <http://www.kitahiroshimanishi.hokkaido-c.ed.jp>

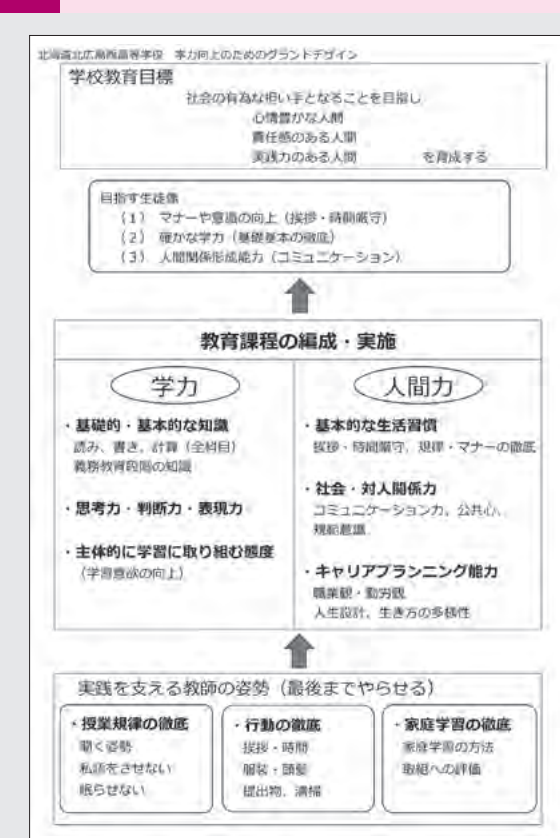
いった、具体的な検討に移ることができたのです」（徳橋先生）

週末課題スタート、そして学校設定科目の設定へ

改革の最初の一步は、生徒の学力を定観測することだった。1・2年次にそれぞれ年1回の実施だったベネッセの「基礎力診断テスト」(*)を13年度より複数回実施にし、教師個々の経験や感覚だけに頼らない生徒把握を目指した。また、並行して学習

状況調査も行った。生徒の1日の家庭学習時間が30分にも満たないという現実が明らかになり、学習意欲の喚起と家庭学習習慣の確立が喫緊の課題であると学校全体で共有した。そこで、14年度にスタートさせたのが1年生を対象とした週末課題だ。それは、1学年団の国語・数学・英語の教師が毎週末に課題を配布し、週明けに回収するというもので、家庭学習の習慣化が目的のため、各教科10分程度で終わらせる平易な問題と

図1 将来構想会の「学力向上のためのグランドデザイン」



*学校資料をそのまま掲載

* GTZ（学習到達ゾーン）という指標で生徒一人ひとりの基礎学力の定着度と学習力、コミュニケーション特性（自我同一性）を測る、ベネッセの生活・学習指導用テスト。

した。週明けに、担任・副担任が提出の有無を記録し、未提出者には放課後に課題に取り組ませることにした。

「机に向かう習慣をつけるためには、とにかく毎週続けることが大切だと学年団で意思統一しました。そのかいがあつて、週末課題の提出率は、95～97%という高い数値で推移し、その後の学習状況調査でも、家庭学習時間の大幅な増加が見られました」（伊藤先生）

教師の意思統一を土台とした地道な指導は、生徒の学力向上に確実につながり、「基礎力診断テスト」におけるGTZ（*1）の分布状況も好転した。しかし、高校レベルの学習内容の理解に困難を感じる生徒は依然として多く存在した。また、同校の在校生とその保護者、そして地域住民の合計約1000人を対象に、学校に対する満足度調査を実施したところ、学力向上への期待値は高かったが、その現状には決して満足しているとは言えないことも明らかになった。

同じ頃、同校は、学び直しに取り組み先進校を視察した。

「視察先では、『簡単な小テストで追試を繰り返しても、学力が身につ

いていない生徒が覚えるのは解法ではなく、答えである。自分で学術を獲得する機会を与えないと、いつまでも分かるようにはならない」と、実践に基づく意見を伺いました。早速その内容を校内に周知しました」（徳橋先生）

新しい取り組みに合わせて従来の取り組みをリデザイン

学び直しを目的とした学校設定科目「ベーシックスタディ」では、ベネッセの「マナトレ」（*2）を用いて、1枚10分相当のプリント3枚に取り組ませることとした。授業は3人の教師がチーム・ティーチングで実施。2人が机間巡視し、生徒は分からない問題があれば、その教師たちに自由に質問できるといった仕組みにした。進行役の教師が全体に向けて簡単な説明や解説を行うこと

図2 学校設定科目「ベーシックスタディ」シラバス

科目名		ベーシックスタディ				
学年	必修/選択	単位	総時数	使用教科書		
1	必修	1	35	補助教材	マナトレ	
授業の概要		高校で学習する内容を理解できるよう、小・中学校の国語、数学、英語の授業で学んだ内容の復習をグループ学習や協働学習の形式で行います。				
学習到達目標		高校での学習に必要な語いや計算方法を理解でき、それらを活用して自ら課題に取り組み、解決することができる。				
標準的な到達レベル		1人で解答することが困難な課題や問題であっても、教員や友人から十分なヒントや手助けが与えられれば解答を導き出すことができる。				
観点別評価（％）						
		定期試験	提出物	課題	授業姿勢	合計
総合評価割合		40	20	20	20	100
知識・理解		40	10			50
関心・意欲			10	20	20	50
学習上の留意点						
求められる力（学び直し）		・どの教科を学ぶ時にも必要な「読み・書き・計算」を不自由なく行う力 ・自ら考えようと行動する力				
キャリア教育		クラス全員が目標を達成できるよう協力しながら問題解決に取り組むことを通して、協調性や自分の考えなどを相手に伝える能力を伸ばす。				

*学校資料を基に編集部で作成

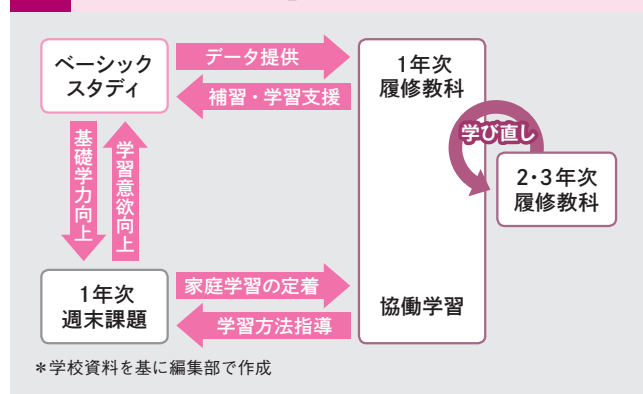
もあるが、できる限り生徒が自分の力で答えるにたどり着くよう、安易に解法を教えないようにした。佐賀聡副校長は、「取り組み前に、指導の意味や留意点を共通理解することが重要」と説明する。

「マナトレ」を使って、チーム・

ティーチングで教えることは理解できても、3人の役割分担など、授業の様子を詳細にイメージすることは難しいので、先生方から不安や疑問の声を集めてそれらに丁寧に応えていきました。その後、先行して1クラスで公開モデル授業を実施しまし

*1 学習到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の評価指標。「S1」～「D3」までの15段階があり、基礎力診断テストでは、そのうち「A2」～「D3」で評価される。 *2 ベネッセの教材の1つ。学習力を身につける、小・中学校範囲の学び直し専用のプリント教材。

図3 「ベーシックスタディ」を軸にした学びのキャリア形成



た。それによって、指導の意味や留意点が具体的に理解できたことで、全員の先生方が納得して授業を始めることができました」（佐賀副校長）

「『ベーシックスタディ』を通して、補習や学習支援の必要な生徒を発見できるよう、『マナトレ』の正答率は週末課題の提出率などと合わせてデータ化され、さらに週末課題や各教科の学習内容との関連づけ、学年・教科・分掌間の連携を図ることとし

た（図3）。「ベーシックスタディ」は基礎学力の向上を目的とするため、週末課題は前年度よりもやや難易度を高め、学んだことが定着したことを実感させる役割となった。

学び直しを授業に組み込んだ効果は顕著に表れた。「基礎力診断テスト」のGTZのAゾーンは前年度同時期と比較して、0人から11人に、Bゾーンは15人から33人になった。また、学習困難を抱えるDゾーンから3割近い生徒がCゾーンに伸びた。

学び直し科目の導入によって、職員室での教師の会話も変わった。

「『学力向上』や『学び直し』といったキーワードが日常会話の中で頻繁に聞かれるようになりました。また、その目標を達成するためにどうすればよいのかといった、それぞれの授業での取り組みの成果や反省点を先生方が語り合う場面が明らかに増えました。基礎・基本の習得とともに重要視されている、思考力・判断力・表現力の育成についても、その鍵となるアクティブ・ラーニングの授業実践の共有が活発に行われていま

す」（佐賀副校長）

学び直し科目の設定と並行して、1年生の宿泊研修の内容も学び直しとキャリア教育の観点から見直された。15年度は学習法を学ぶ自学自習の時間を充実させ、さらにこれまではなかった大学見学やソーシャルスキル研修を盛り込むなど、育てたい生徒像から取り組むべき内容を吟味していった。

未来を見通した 不断の教育改革を

16年度は、「学力向上とキャリア教育の取り組みの質を高め、発展させる時期」と、今年度同校に赴任した廣田定憲校長は語る。

「改革を続けていくためには、学校で引き継がれている『たすき』を管理職がしっかりと受け取ることが大切です。そして、今取り組んでいることは、目の前の生徒のためでもあると同時に、5年後、10年後の生徒のためでもあるのだと強く意識することが求められます」（廣田校長）

廣田校長は「学びの連続性を考え

た時、小・中学校と連携したカリキュラム・マネジメントは必然だ」と語る。同校の教師が地域の小・中学校の授業を見学し、また小・中学校の教師に高校の授業を見てもらい、アクティブ・ラーニングや観点別評価について意見交換するワークショップを開催する予定だ。

「教師の仕事は『未来をつくる人材を育てること』だからこそ、未来の社会で有為な人材とはどんな人材なのかを、教師が語り合うことが大切です。中央教育審議会教育課程企画特別部会の論点整理が『2030年の社会と子供たちの未来』を見据えて打ち出されたように、激変する社会を生きる生徒を育てるということとを共通認識することで、おのずと自校の教育のあり方が見えてくるはず。そして、私が本校で受け取った『たすき』が、学び直しとキャリア教育だったのです。これまでの取り組みを進化させながら、先生方の志が1つにまとまり、大きな力となるような場づくりをこれからも行っていきます」（廣田校長）

共学化を機に基本理念を策定し、教育活動を改善し続ける

高槻中学校・高校は、2012年度から学校改革を進めている。まず、スクールミッションを制定し、その具現化を目指して3コース制を導入。カリキュラムも改訂し、教育の充実化を図ってきた。そうした中、14年度に17年度からの共学化が決定。5か月間の議論を経て、15年度、同校の基本理念を策定し、全校で共有。スクールミッションと基本理念に基づいた新たな教育活動を構築しようとしている。

スクールミッションを制定し、改革をスタート

大阪府にある高槻中学校・高校は、私立の中高一貫の男子校だ。例年、京都大学、大阪大学といった難関国公立大学や、医学部医学科などに多数の合格者を出している。そうした同校が、岩井一校長の就任を機に学校改革に着手したのは、2012年度のこと。まず、岩井校長の考えで、新たなスクールミッションが公募された。

「教育目標は不変ではなく、社会構造の変化に対応して変わるものではないでしょうか。本校は、国家社会

を担う人材育成を目標に創立しました。ですから、さらなるIT化とグローバル化が予測される社会で活躍する人材を育むためには、今どのような教育を行えばよいのかを改めて考え、本校の教育活動を進化させるべきだと考えました」

応募された6〜7案について、校長、副校長、教頭らの管理職で議論し、新たなスクールミッションを「Developing Future Leaders With A Global Mindset」に制定（図1）。小学生にも理解できるように和訳をつけて、学校内外に発信した。

そのスクールミッションの実現に

向けて最初に動き出したのは、英語教育改革だ。ペリリッツと連携し、ネイティブ講師による中学校1〜3年生の「英会話」の授業を、それまでの週1回から週3回に増やし、コミュニケーション力育成を強化した。さらに、英語教育顧問として東京学芸大学の金谷憲名誉教授を招聘し、指導を受けた。

次に行ったのが、「探求型学習」の導入だ。工藤副校長は、12年8月にアメリカの大学6校を視察し、大学が求める学生像や、入学した学生が身につけている力などを調査して、自校でも、生徒が自ら課題を設定し

図1 「School Mission」と3つのコースの特徴

●School Mission

Developing Future Leaders With A Global Mindset

卓越した語学力と国際的な視野を持って、世界を舞台に活躍できる「次世代のリーダー」を養成することを、本校の使命とします。

●3つのコースの特徴

GL（グローバルリーダー）コース：英語運用能力を備え、グローバルマインドセットを持つ次世代リーダーを育成する

GS（グローバルサイエンス）コース：先端学力知とグローバルマインドセットを備えた生命科学系リーダーを育成する

GA（グローバルアドバンスト）コース：グローバルヘルス向上の視点を持って、国際的な諸課題に創造的に挑戦する次世代リーダーを育成する

*学校資料を基に編集部で作成



高槻中学校・高校校長
岩井 一 いわい・はじめ
教職歴42年。同校に赴任して42年目。「学校を変えれば生徒は変わる。最優の進学校を目指し、現在進行形」



高槻中学校・高校副校長
工藤 剛 くどう・つよし
教職歴27年。同校に赴任して28年目。「生徒のために、常に無二の教育機会を提供を志す」



高槻中学校・高校教頭
池田 祥行 いけだ・よしゆき
教職歴24年。同校に赴任して25年目。「他者とかかわりながら自分を高め、社会に貢献する素地を生徒に育む」



高槻中学校・高校教頭
前田 秀樹 まえだ・ひでき
教職歴21年。同校に赴任して18年目。「楽しい学び、学校生活を通して、本校にしかない価値を創造したい」

大阪府・私立高槻中学校・高校

- ◎私立の中高一貫の男子校。2014年度、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校、15年度、スーパーグローバルハイスクール（SGH）アンシエイト指定校、16年度SGH指定校となる。17年度に共学化予定。
- ◎設立 1940（昭和15）年
- ◎形態 全日制／普通科／男子
- ◎生徒数 1学年約260人
- ◎2016年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、東京大、京都大、大阪大、神戸大などに159人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ456人が合格。
- ◎URL <http://www.takatsuki.ed.jp>

て、探究し、結論を導いて、発表する力を育てるべきだと痛感したと話す。「世界で活躍する力を生徒に育もうと考えた時、アメリカの高校教育にあって日本の高校教育にないものが、SSHで行っているような体験的学習や課題研究だと実感しました」

大学進学に向けた学力の担保も考慮し、「総合的な学習の時間」を中心に、行う「探求型学習」のカリキュラムを構築。14年度、GL（グローバルリーダー）、GS（グローバルサイエンス）、GA（グローバルアドバンスト）の3コース制を導入した（図1）。コースに分かれるのは中学校3年次であるため、より早い段階から目的意識を持つて学習に取り組むことや明確な進路意識が必要となる。それらに対応できる中学校1・2年次での指導を考え、6年間のカリキュラムを編成した。

GSコースはスーパーサイエンスハイスクール（SSH）、GAコースはスーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定も視野に入れていたため、それぞれ関連する教科の担当者メンバーとなる委員会を結成し、

カリキュラムを構築した。

「改革にはスピードが重要です。教師全員ですべてのことを議論していたら、なかなか前に進みません。教師の能力や得意分野には違いがありますから、関係教科やその分野を得意とする教師で課題ごとにチームをつくり、そこでの決定事項は学校全体で守ることにしました」（岩井校長）

役職、教科、教職歴の異なるメンバーで、目指す学校像を検討

そのようにして改革を進める中、創立時から関係の深い大阪医科大学と14年度に法人合併することとなり、それを機に同校の共学化が浮上した。同大学の医学部医学科の3割が女子学生であり、女子学生の多い看護学科もあった。さらに、同大学と大阪薬科大学の法人統合も協議されていた。

「女子学生の比率の高い大学と合併するのであれば、本校が男子校のままでは大学との連携がスムーズにいかないことが予想されました。そのため、いずれ共学化するのではなく、今、共学化し、学校改革を一気に進

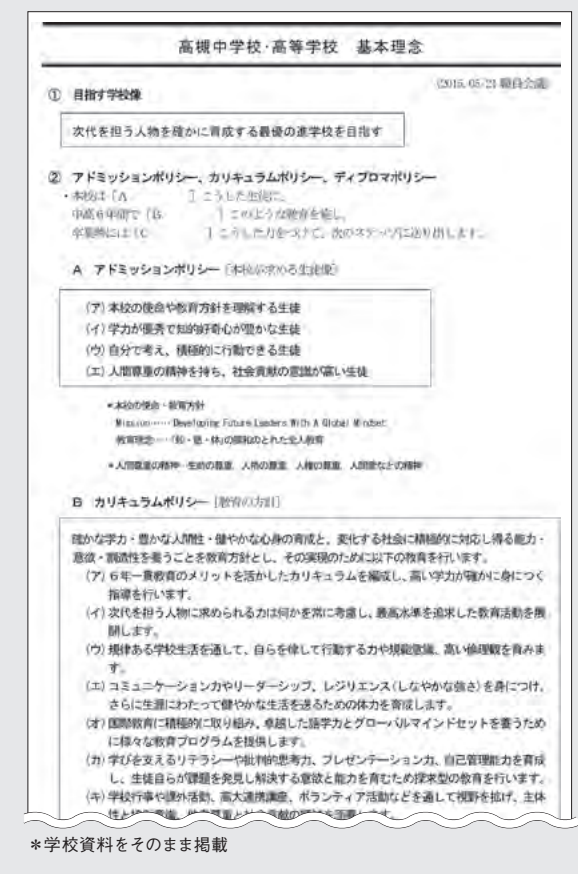
めた方がよいと決断しました。本校の中学校入試の受験者数は、入学定員の数倍はあり、地域からの評価も得ていました。だからこそ、攻めの姿勢でよりよい学校へと変えるべきだと考えたのです」（岩井校長）

14年11月に正式に共学化が発表され、12月には「共学化特命プロジェクトチーム」が結成された。校長が選定したメンバーは、副校長、教頭、各校務分掌の部長、共学校の勤務経験のある女性教師ら11人だ。15年1月の最初の会合で、岩井校長は「今までの実績もあるが、その伝統を引き継ぐだけではなく、『最優の進学校』を目指して、学校を一から設計してほしい」と伝えた。チームリーダーの前田秀樹教頭は次のように語る。

「『最優の進学校』を目指して何をすべきかを考えるために、まずは教育目標を具体的に定義していこうとメンバーで意見がまとまり、その検討に多くの時間をかけました」

メンバーは役職も担当教科も教職経験も様々であり、意見も多様だった。そこで、前田教頭は会議のテー

図2 「高槻中学校・高校 基本理念」



マを事前に伝えて意見を出してもらい、それらを集約した結果から導いた方向性を会議で議論するという手法を採った。また、大学と同様に3つのポリシー（*）を定めることとし、生徒に育みたい力を「次代を担う人物に求められる『10の資質』」とまとめるなど、教育目標の具体的な示し方を様々な観点で検討した。

「会議の内容は職員会議で報告し、そこで出てきた意見についてもチームで検討しました。チームの独断ではなく、全校の理解を得ながら形にしていっただけです」（前田教頭）

生徒の成長を実感することで 理念を真に理解できる

10回の会議を経て、15年5月、「目指す学校像」「アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー」「次代を担う人物に求められる『10の資質』」「次代を担う人物に求められる資質を育成するための環境」が示された基本理念が策定された（図2）。

教育活動の構築時には、スクールミッションと基本理念に照らし合わせて検討する。例えば、共学化で新

しくなる制服も、それらを基に「ヤング・グローバルリーダー」「品」などのキーワードを決めて検討した。

すべての教育活動のよりどころとなるスクールミッションと基本理念は、常に意識できるよう、職員会議などで頻繁に提示する。そして最も大切にしているのは、それらの内容を教師一人ひとりが真に理解することだ。

「GAコースの高校1年生と2年生で行う海外研修は、SGH委員会と学年団が協働で運営します。計画からかかわってきた先生方は、研修先で生き生きと発表する生徒の姿を見て、取り組みの意義を真に実感します。そのような体験を教師一人ひとりがしていくことで、学校全体のベクトルがそろっていくのではないのでしょうか」（工藤副校長）

生徒の成長する姿にやりがいを感じられれば、教師の多忙感の解消にもつながる。生徒の成長を見える化して、教師に実感してもらう工夫も必要だと、工藤副校長は言う。

理念の具現化を目指し、ALの推進、ICT教育を本格化

基本理念が策定されると、次の段

階として授業改革を本格化させた。担当教科内での研究授業を年2回実施し、学び合い週間では他教科の授業見学を奨励するなど、他者の授業を見る様々な場を設けている。さらに、アクティブ・ラーニング（AL）推進チームを立ち上げ、京都大学の松下佳代教授をアドバイザーに招き、通年で研修を行っている。その内容は「アクティブラーニング型授業通信」にまとめ、全教師に配布して共有する。これまではチームリーダーの前田教頭が通信を書いていたが、今後は参加者の持ち回りにする予定だ。

「通信の執筆を通して研修を振り返ることで、研修をより深く理解でき、自身の実践にもつながると思います。そうすることで、ALが校内により浸透していくのではないかと期待しています」（前田教頭）

ICT教育も本格的に始めた。既に電子黒板は全教室に整備されており、教師も1人1台のタブレット端末を持っている。そして、16年度、中学校1年生全員にタブレット端末を持たせ、クラウドベースの教育ツールをあらゆる授業で活用している。池田祥行教頭は次のように説明する。

* アドミッション・カリキュラム・ディプロマの3つのポリシーのこと。アドミッション・ポリシーは入学受け入れの方針、カリキュラム・ポリシーは教育課程編成・実施の方針、ディプロマ・ポリシーは卒業認定・学位授与の方針のこと。教育機関の特色を示すものとして、2017年4月から、大学には策定・公表が義務化される。

「二斉授業、協働学習、個別学習と、どの学習形態においても活用できるのがタブレット端末です。今後は、教師と生徒がともにPDCAサイクルを回すためにも、生徒の活動を記録するポートフォリオが重要になります。タブレット端末ならば生徒が身近に置いて、すぐに自分の活動や気づきを記録できると考えました」

教師の多忙化を軽減するツールとしてもICTの役割は大きいと、池田教頭は言う。例えば、宿題の配布と提出はクラウドを経由して行えば、手間や時間がかからない上に、提出物の確認が場所や時間を選ばずにできる。また、会議資料は共有フォルダに入れておき、閲覧済みを前提に会議を進め、会議の時間短縮を図っている。

「教師各自が作成した指導案や教材も、サーバーで蓄積して、学校全体で共有しています。ほかの教師の指導法や、前年度の指導内容が分かるので、各自の指導改善に生かれます。今後は、それらを体系化することで、授業の標準化にも生かしていきたいと考えています」(池田教頭)

授業改革でこだわったことの1つは、最先端の研究・事業を行う大学や企業などと連携することだ。

「二流に触れること自体が学びになる上に、指導を受けながら課題をやり遂げた経験は、生徒を大きく成長させます。それは教師も同じことで、最先端の研究をしている研究者から学び、議論することで、先生方の意識は変わり、教師間の足並みがそろっていきました」(工藤副校長)

よりよい教育を求めて カリ・マネを続ける

「中央教育審議会の答申や教育再生実行会議の提言を読み、本校の学校マネジメントやカリキュラムづくりの方向性は間違っていないと確信していた」と岩井校長が語るように、同校が進める学校改革はカリキュラム・マネジメントの観点が十分に盛り込まれている。毎年、生徒・保護者・教師へのアンケートと学校評価も行っており、カリキュラムのPDCAサイクルを確実に回している。

改革前とは学校文化が大きく変

わったと、池田教頭は実感している。「学校が決めたことだから行うのではなく、自分で考えて行うという意識を先生方が持つようになりました。新しい取り組みもスピーディーに進むようになっていきます」

現在は、岐阜大学の田村知子准教授の指導を受け、カリキュラム・マネジメントについて体系的に学び、授業改革に生かそうとしている。

一連の改革により、生徒の意識も変わりつつある。以前は、進路講演会の質疑応答の時間になると、会場が静まり返ることもあったが、今では生徒から多数の質問があり、外国人の講演者には何とか英語で質問しようとしている。さらに、海外研修の振り返りでは、生徒自ら「僕たちがグローバルリーダーにならなくてはいけない」と口にするようになった。スクールミッションが生徒にも浸透していることを、同校は実感している。

「学校説明会では毎回、数十人の生徒が、会場の案内、学校説明、保護者との質疑応答などをボランティアで担当します。その姿を見た保護

者から、『自分の子どももあのような生徒になってほしい』という声を聞きます」(池田教頭)

今後の課題の1つは進路指導体制の改善だと、工藤副校長は言う。

「ある生徒が『親を説得して、アメリカの大学に行く』と言ったということを知りました。改革の成果が表れていると喜ばしく思う反面、グローバルリーダーの育成を掲げているのならば、海外の大学への進学支援をするための体制を早急に整える必要があることを痛感しました」

岩井校長は、今後の展望として、教育活動に真摯に向き合うからこそ、カリキュラム・マネジメントを続けなければならないと語る。

「改革を進めていくと、成果と同時に新たな課題も見えてきます。その課題に取り組むと、また次の成果と課題が出てくる。その繰り返しによって、学校全体が理想とする目標に近づいていくのではないのでしょうか。よりよい形を追いつめるという積極的な姿勢で、これからの教育活動に取り組んでいきたいと思っています」

ハートも
こがせ!

Vol.09

三重県立相可高校

高校生レストラン「まごの店」

先輩とお客様に
鍛えられ、目指すは
一流の料理人!

心を込めて仕込みをし
レストランでいざ勝負!

料理人を目指す相可高校食物調理科の生徒にとって、「まごの店」はまさに実践の場だ。メニューや食数の決定、材料の仕入れ、調理、そして接客、経理と、すべて生徒が行う。取材した日曜日は、3年生の卒業後であり、2年生全員がインターンシップで不在となるため、初めて1年生のみで店を切り盛りすることになっていた。そのため、メニューは一番人気の花御膳200食のみと、いつもより控えめに設定したが、それでも緊張したと、接客・配膳を担当した丸山詩織さんは言う。

「今までは先輩の判断の下で動いていました。でも、今日は自分たちの判断で調理し、お客様に接しなくてはいけないと思うと、とても緊張しました」
週末の営業に向けて、仕込みは木曜日の放課後から始め、毎日午後7時頃まで行う。野菜は食材

ごとに切りそろえて炊き、魚は内臓を取って煮つけにする。そのような場面は、先輩から料理を教わる絶好の機会だ。瀬良佳乃^{かの}さんはポケットにメモ帳を入れ、先輩のアドバイスを書き留めている。「お店の料理には、授業では扱わない食材もあります。下ごしらえや調理の仕方を先輩から教えてもらいます。味も、先輩が作る料理を何度も味見して、自分の舌で覚えるんです」

きっちりしたレシピのないことが「まごの店」のよさだと、接客・配膳担当の小谷懐都^{かづ}さんは言う。「調味料の割合が決まっているわけではないので、お店で出す料理の味は、最終的には調理する人に委ねられます。それは大きな責任を担っているということ、日々勉強なのですが、作る人によって異なるおいしさを提供できるので、お店に何度来られても飽きないのではないかと思います」
営業日は、朝6時に学校に集合し、最後の仕込みをしてから、マイクロバスに食材を積み込む。

教師の思い

プレッシャーに負けず
たくさん経験を重ねて
羽ばたいてほしい



三重県立相可高校
奥田清子
おくだ・きよこ
教職歴38年。同校に赴任して15年目。
食物調理科主任。

お金をいただいて作るという
緊張感が様々な学びを生む

「まごの店」では、生徒は料理人の顔になります。授業の調理実習では、一生懸命作っても、料理を食べるのは自分たちです。一方、店では、初めて自分たちの料理を食べる人たちからお金をいただいて提供します。授業と店とは、緊張感が全く違うのです。
店では接客も担当します。生徒は「料理人は料理が上手であればよい」と考えがちですが、最近是对面式の料理店も多く、接客技術は優れた料理人の重要な要素です。店でお客様と接して、コミュニケーション力や教養の必要性に気づくと、専門科目以外の授業も頑張るようになります。

生徒の多くは、卒業後すぐにプロの料理人として働き始めます。店での実体験は、

店に着いてすぐに準備をし、10時30分に開店だ。

どんなに厳しくても お客様の声で頑張れる

瀬良さんは野菜の天ぷらの調理を担当し、3種類の野菜を200人分、1人で全部揚げた。前日は2年生と一緒に担当し、その時に先輩にもらったアドバイスをメモしておき、それを守ったという。「天粉が温まったり混ざりすぎたりすると、粘りが出て、カラッと揚がりません。粉に混ざる水は冷やしておき、少量ずつ作るようにしました」開店と同時に満席となり、受付表もいっぱいになったため、お客様を待たせないよう、スムーズな配膳と片づけをより心がけたと、丸山さんは言う。「みんなで声をかけ合い、できたてをすぐにお出しし、会計後はすぐにテーブルを拭きました。声

の出し方、配膳の仕方など、入学時から先輩に何度も指導されましたが、夏休みを過ぎた辺りから、自分で気を配れるようになったと思います」

そうして開店から3時間が経った頃、200食が完売。最後のお客様を見送り、片づけが終了したのは15時頃だった。毎週末が営業日のため、休みはほとんどないが、「今日、配膳中に、僕が作ったみそ汁を『おいしい』と言うお客様の声が聞こえてきたんです」（小谷さん）といったような喜びが、毎日頑張る原動力になっている。1年間鍛えられ、調理も接客も一通りできるようになったが、学ぶことはまだまだたくさんあると3人は口をそろえる。

「店の経営には数学の知識が必要ですし、接客には国語などで培われる表現力が生きてくると分かりました。もうすぐ1年生が入ってきますが、負けたくはありません。先輩や先生から技術を学んで、腕を磨いていきたいと思います」（小谷さん）

卵焼きは作りたてを提供する。担当者が「サービス、お願いします」と声をかけると、接客・配膳係がすぐにトレーを受け取り、お客様に配膳した。2人同時に駆け寄りそうになった時にも、どちらかが「私が行くよ」と声をかけ、もう1人は別の仕事に取りかかる。目配せをし、声をかけ合い、スムーズなサービスを実現している。

小谷 懐都

こたに・かいと

1年生。今回は、接客・配膳を担当。

瀬良 佳乃

せら・かの

1年生。今回は、野菜の天ぷらの調理を担当。

丸山 詩織

まるやま・しおり

1年生。今回は、接客・配膳を担当。

生徒にとって大きな財産になるのです。

店が新聞やテレビで紹介されてからは、県外からもお客様がいらつしやるようになりました。さらに、生徒が料理コンクールで上位入賞することが増えると、ますます注目され、地域のイベントへの出店や料理教室の開催、企業との商品開発など、生徒の活躍の場は広がっています。また、伊勢志摩サミットのジュニア・サミットでの訪問先の1つという話もあります。

一方で、生徒にかけられる期待も大きくなり、東京や大阪からも求人が来るようになりました。ただ、生徒が皆、最初から料理が上手というわけではありません。周囲のプレッシャーに負けまいと、生徒は日々努力を重ねています。そうしたことも、生徒を大きく成長させていると感じています。

三重県立相可高校

◎相可村外三ヶ村組合農業学校として開校後、1955年に現校名に改称。2010年に三重県立宮川高校と統合し、現在の形となる。地域の専門家による講義、教師や生徒による地域開放講座など、地域や産業界との協働が充実。

◎設立 1907（明治40）年

◎形態 全日制／普通科・生産経済科・環境創造科・食物調理科／共学

◎生徒数 1学年約240人

◎2016年度進路実績（現役のみ）

国公立大は、三重大、滋賀大などに4人が合格。私立大は、愛知大、龍谷大、近畿大などに延べ102人が合格。短大、専門学校進学99人。就職93人。

◎URL <http://www.mie-c.ed.jp/houka/>

9:55 授業開始



「有機化合物のまとめ」で取り組む3つの課題を提示し、単元を俯瞰することを意識するよう話した。この日は、まず「有機化合物の種類が多い理由」を、前時までに学んだ12のテーマのうち、いずれか2テーマの知識を用いて、4人グループで考えた。2テーマの割り当ては、くじ引きで決定。

授業を進化!

思考を深化!

実践 アクティブ・ラーニング

化学

学び合い、
支え合う協働学習と
気づきを促す問いかけで、
批判的思考力を高める

●2年生「化学」の授業は、予習を前提としながら、協働と発表を通して理解を深め、考え方や表現力を養っている。この日は、前時までに学習した有機化合物の知識を活用する。「有機化合物の種類が多い理由を説明する」という課題について、グループワークを経て、生徒が発表を行った。(P.29に授業デザインを掲載)

榎本先生のアクティブ・ラーニング

「生徒が『先』を心がけて
授業では見守るスタンスを徹底

榎本先生の授業は、先生の発言が驚くほど少ない。この日の授業でも、先生が話した時間は合計5分程度だ。

授業での発言主はほとんど生徒である。生徒が板書をしながら説明する様子を教室の後ろから見守る榎本先生の姿は、授業の方針をよく表



長崎県・私立純心中学校・純心女子高校

榎本六秀 つちもと・むつひで

教職歴20年。

同校に赴任して21年目。進路指導主事。

アクティブ・ラーニングの実践は18年目になる。

長崎県・私立純心中学校・純心女子高校

◎「清く・かしこく・やさしい女性に」を教育方針として、カトリックの精神に基づき豊かな人間性を育む教育活動を展開。英語教育にも力を注ぎ、グローバルに活躍する女性を育成する。

◎設立 1935(昭和10)年

◎形態 全日制/普通科/女子

◎生徒数 1学年(高校)約220人

◎2016年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、山口大、福岡教育大、佐賀大、長崎大、熊本大、鹿児島大などに24人が合格。私立大は、青山学院大、上智大、津田塾大、立命館大、長崎純心大などに延べ185人が合格。

◎URL <http://www.n-junshin.ed.jp/>

各グループの代表者が順に前に出て板書しながら説明した。発表者は授業をするかのように、メモなどを持たずに説明。聞く側の生徒も説明に集中し、板書でミスをする、説明している生徒に指摘することもある。5分程度で説明するように指示したが、10分程度に延びる生徒もいた。

本時の課題については全員が予習しており、予習内容の共通点や相違点に着目して進めるように指示した。すぐに活発な話し合いが始まり、A3用紙にグループの意見をまとめていく。当初は10分の予定だったが、榎本先生は生徒の表情からもう少し時間が欲しいことを察し、5分程度延ばした。

している。

17年前、榎本先生がアクティブ・ラーニングに取り組み始めた当時は、生徒が先生の授業内容をまとめて、教室の前に出て説明する形態だった。

「その授業でも、生徒の論理的思考力は高まり、学力は向上しました。しかし突き詰めて考えると、生徒は教師に教えられたパーツを組み合わせて説明しているだけで、私が教えた以上の内容が出てくることはなかったのです」

確かに、そうした授業形態は論理的に説明する訓練にはなるが、真に思考が深化しているわけではない。そう感じた榎本先生は、試行錯誤を経て、生徒が「先」、教師が「後」の授業スタイルに行き着いた。

授業では、先生が課題を示すとすぐにグループワークに移り、その後、各発表者が5〜10分、板書をしながら説明した。グループワークの間、先生はほとんど机間巡視をせず、生徒が説明する時も口を挟まないばかりか、椅子に座って目立たないようにして見守っている。

「教師が近くを通ると、『間違えてはいけない』と思うのか、生徒は意見を述べる声のトーンを落としてしまいます。また、立って説明を聞いていると、こちらを見てしまいます。あくまでも授業の主役は生徒ですから、教師を意識せず話せる環境をつくるように心がけています」

単元を「俯瞰」し、全体を捉えて答えを考える

前時までは、有機化合物の12のテーマ（*1）について、グループワークを経て生徒が発表する授業を行ってきた。この日は、3つの課題（*2）の1つ、有機化合物の種類が多い理由について、12のテーマのうち各グループが2つのテーマで学んだ知識を用いて説明することが求められた。例えば、あるグループは「同族体と一般式の関係」の観点から課題に取り組んだ。

「既習の内容から必要な知識を自分で判断して抜き出し、具体例を挙げながら、説明していきます。今回の課題のように、答えが1つとは限らない課題に対応するためには、単元の全体を捉えた上で、適切な答えを導き出すことが必要です。単元、場合によっては化学の全体を『俯瞰』して考えることが大事だと、繰り返し伝えていきます」

そうした授業は、生徒が予習をしているからこそ成立している。この日のグループワークも、生徒が予習した内容を持ち寄り、共通点や相違点を確かめる段階からスタートしたため、15分程度のワークでも、聞き手が十分に理解できる分かりやすい説明が可能になった。

「予習の量は多くなることもありますが、全員がしっかり取り組んできます。大切な友人との協働を成立させるための予習なので、頑張っ

*1 前時までに説明した12のテーマ <脂肪族化合物> ①同族体と一般式の関係、②構造異性体と名称、③その他の異性体、④置換反応と付加反応・付加重合、⑤アルコールの種類と酸化反応、⑥アルコール、カルボン酸の分子内脱水と分子間脱水、⑦油脂の作り方とけん化、そしてセッケン、⑧有機化合物の元素分析 ▲



生徒が発表する時間をできるだけ長くするために、この日はまとめの時間を数分間にとどめた。主体的に発表する姿勢を評価するとともに、「普段の学習でも『俯瞰する力』を意識してほしい」と、改めて学習の根本にあるねらいについて強調した。



植本先生は、生徒が説明している間は全く発言しない。発表者だけではなく、教室全体を見回して生徒の表情や反応から理解度を確認している。説明後、聞いていた生徒が誤りを指摘する時間も、「気になることはないか」と発言を促す程度で、あくまでファシリテートに徹していた。

てくれるでしょう」

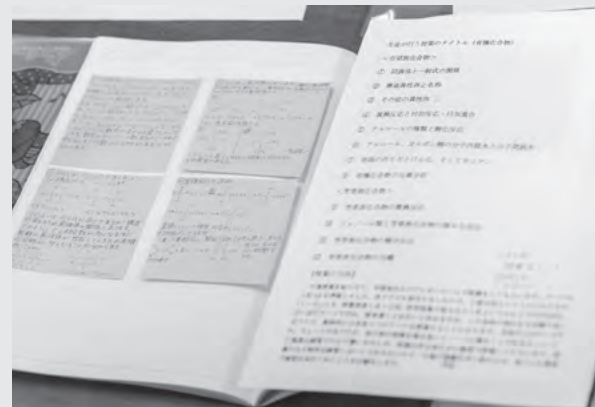
思考の活性化・深化への配慮

教師は誤りを訂正せず 次の授業まで考えさせる

生徒主導の授業では、生徒が不十分な理解のまま説明を進める場合もあるが、そこにも重要な意味があると、植本先生は言う。

「教師の話は『先生だから正しいだろう』と思って聞きますが、生徒の説明は『間違いはないだろうか』と考えながら聞くため、批判的な思考力が育つのです」

説明後には、説明を聞いていた生徒からの質疑を受ける時間を取っており、「そこは間違いではないか」「ここは〇〇だと思う」といった意見が活発に交わされる。ただ、この日、ある生徒が誤った構式を書いたが、最後まで指摘されない場面があった。そうした状況でも、植本先生はすぐには誤りを訂正せず、発表者に対して、「何か気づいたことがあったら、次の授業の前に黒板に書いておいて。なければ、そのままでもいいから」と伝えた。この問いかけに促されて、生徒は、授業後に自身の説明内容を見直し、グループのメンバーと相談したり、自宅で振り返ったりして、誤りに気づくという。次の授業前にその誤りを訂正したものが板書されていれば、誤りに気づいていなかった生徒の理解も修正できる。



予習時には付せん紙に自分の考えをまとめるため、グループワークで効率的に意見の集約ができる。また、ノート作成に気を取られて時間を割いてしまうことがないように、付せん紙を使うように指導している。

発表者が誤りに気づかなかった場合は、植本先生はそれを記録しておき、定期考査までに練習問題を解かせるなど、生徒が再び考える機会を設ける。理解に誤りがあった生徒は、当然間違えるため、「なぜ？」という疑問が生じて、さらに思考が深まっていく。

「教室の後ろで生徒の説明を聞きながら、『どのタイミングでどんな問題を解かせようか』などと常に考えています」

場づくりへの配慮

化学の授業を使って 生きる力を育む

生徒が主体となって説明し、誤りを指摘し合

授業デザインシート

【教科・科目】化学

【分野・単元】有機化学

【テーマ・作品】有機化合物のまとめ

【設定時数】24 時間中の 20 時間目

【本時全体の目標】有機化合物の種類が多い理由を説明する

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標 (身につけさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
授業の目標	学習内容をパーツとしての理解でとどめるのではなく、「俯瞰する力」を身につけ、単元観を理解するとともに、その力を支える知識・技能の重要性に気づかせる。	- 思考力 - 判断力	【教師】常に俯瞰することを意識すれば、学習の目的が分かりやすくなることやアウトプットの軸がぶれないことを伝える。 【生徒】普段の授業におけるアウトプットがうまくいく場合とうまくいかない場合があることの原因を知りたいと感じる。	今日の授業でも、いつも話している「俯瞰する力」を養う。そのためには、知識・技能が欠かせないことも感じてほしい。	3つの課題と12のテーマを黒板に貼ることで、目視で単元を俯瞰できるようにする。
グループ分けとテーマ決め	議論を円滑に進めるためのリーダー役を始め、自分の役割を考えさせる。	- 判断力 - 主体性 - 協働性	【教師】前時までに有機化合物の12のテーマについて発表した。その知識を活用して、今回提示した3つの課題のうち1つについて説明する。 【生徒】4～5人のグループをつくり、くじ引きによりテーマを決める。	各グループがどのテーマの発表をするかは運次第。臨機応変に対応できるように準備をしよう。	ゲーム性を持たせて、生徒自身が主体的に動けるようにする。
グループワーク	他者と同じ視点で具体例を挙げられているか、また他者と違った意見を持っているかを確認して、批判的な思考を養う。	- 知識 - 技能 - 思考力 - 判断力 - 表現力 - 主体性 - 多様性 - 協働性	【生徒】課題についてメンバー共通の意見、及び異なる意見を付せん紙に分けて記入し、A3用紙に貼る。意見をまとめて発表者を決める。 【教師】グループワークは生徒だけで考える雰囲気をつくるために机間巡視をしない。話し合いの方向性が授業の意図から大きくずれている場合は再度指示を与えることもある。	有機化合物の学習内容に関して各自確認してきたと思うが、その内容をグループで話し合い、テーマに沿って意見がまとめられているかを確認してほしい。	3つの課題の発表を通して、全員が発表できるように心がける。
発表	グループワークでまとめたグループの考えを説明することで技能や表現力を養う。同時に聞き手に批判的な思考力を養う。	- 知識 - 技能 - 思考力 - 判断力 - 表現力 - 主体性 - 多様性 - 協働性	【生徒】発表者は何も持たずに前に出て、黒板を利用して具体例を提示しながら、グループワークでまとめたグループの考えを説明する。 【教師】発表を見守る。		話しやすい雰囲気になるように必要に応じて声をかける。
意見交換	各自が発表者の説明と学習内容を比較し、批判的思考力を高める。同時に、協働を通してつくり上げる知識の広がりを感じさせるとともに、様々な人の意見を取り入れることで多様性を育む。	- 知識 - 技能 - 思考力 - 判断力 - 表現力 - 主体性 - 多様性 - 協働性	【生徒】発表者の説明に対して補足したいことはないかを各グループで話し合い、ある場合は前に出て意見を述べる。 【教師】発表者の説明に対して補足したいことはないかを各グループに質問する。		発表者の説明内容がよく、意見が出にくい場合は、必要に応じて教師の意見も提示する。
まとめ	本時の学習内容を「俯瞰」し、板書を確認することで、「学力の3要素」を意識させる。	- 知識 - 技能 - 思考力 - 判断力 - 多様性	【教師】1つの課題を解決するための答えは、教科書の特定のページに書いてあるのではなく、単元の総合的な理解から得られることを伝える。また、単元を超えた教科や合教科という視点によって、より問題解決の可能性が広がることを伝える。	主体性と協働性を持って取り組んだことで、「俯瞰する力」をつける必要性を強く感じつつあると思う。また、人前で表現して質問に答えるには、知識・技能が不可欠であることも理解しただろう。授業では3つの課題を提示したが、次はみんなが課題を設定してみよう。	学習内容の成果を目視で確認できるようにする。

*植本先生作成の授業デザインシートを編集部が一部改編

い、考えを深めていく。そんなアクティブ・ラーニングを通して、植本先生は生徒一人ひとりに社会を生き抜くために必要な「自分の軸」を育てたいと考えている。

「自分の軸がない生徒は、誰かが誤った答えを言った時でも、その場の空気に流されたり、辻褄合わせをしたりして、自分の持っている答えを変えてしまいます。正誤にかかわらず、自分が信じた答えをぶつけることで得られる理解もあります。そうした経験を通して、自分の軸は育っていくのです」

生徒一人ひとりが自分の軸を持てたのなら、今以上に考えをぶつけ合い、高め合う姿が見られるだろう。それは授業中に限ったことだけではなく、将来、生徒が答えのない社会に出た時にかげがえのない強みとなるはずだ。

植本先生は、アクティブ・ラーニングの説明に交えて、「キャリア教育」というワードを口にする。

「私は化学の授業を通して、キャリア教育をしているのかもしれませんが。どのような生き方をしたいかといったビジョンがないと、アクティブ・ラーニングは、話し合いや発表という『型』を習得するだけの学びで終わってしまうでしょう。化学の知識にとどまらず、この先、化学を選ばない生徒にとっても、生きることにつながる力を育てたいという思いを強く持っています」



群馬県立
桐生高校

進路意識向上

1年生からの進路意識醸成、 模試結果の徹底分析で 高い志を持たせる

◎町立桐生中学校として開校。校訓は「独立自尊・文武両道」。「グローバルスタンダードの学力を身につける」を、2016年度のミッションに掲げる。07年度からスーパーサイエンスハイスクールに指定。大学・企業・自治体と連携し、独自の理数教育モデル構築に努めている。

設立

1917(大正6)年

形態

全日制／普通科・理数科／
男子(理数科は共学)

生徒数

1学年約280人

2016年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、東北大、筑波大、群馬大、東京大、横浜国立大、新潟大、高崎経済大などに129人が合格。私立大は、慶應義塾大、明治大、早稲田大、立命館大などに延べ461人が合格。

住所

〒376-0025
群馬県桐生市美原町1-39

電話

0277-45-2756

Web Site

<http://www.kiryu-hs.gsn.ed.jp/>

変革のステップ

背景

◎高校入試での学区撤廃の影響で、地元の中学生の成績上位層がほかの地域に流出。安定志向の生徒が多く、高い志を育む指導が必要に

実践

◎1年生からの進路意識の醸成、模試を活用した指導力向上、進路行事の体系化、進路指導部と学年団の連携強化などを図る

成果

◎県外の国公立大学合格に向けて最後まで一般入試で頑張る生徒が増加。教師間の連携も進み、国公立大学の合格実績にも結びついた

地元国立大学から視野を広げ
高い志を持つてほしい

群馬県立桐生高校が進路指導の改革に乗り出したのは、進路指導主事の横関素衛先生が赴任した2010年度のことだ。かつて同校は県内有数の進学校だったが、近隣の進学校が進学実績を徐々に伸ばしていくにつれ、相対的に進学実績が低迷し始めていた。また、07年度高校入試から県立高校の通学区域が全県一区となった影響で、地元の中学生の成績上位層が隣接する前橋市の進学校を目指すようになり、全体的に学力が落ち込んでいた。そうした状況でも、難関大学をねらえる潜在能力を持つ生徒は少なからずいるというのが、教師間の共通意見だった。

「学力にかかわらず、入学時に半数以上の生徒が地元の群馬大学を第1志望に挙げますが、高校生活を謳歌する一方で、学習習慣が身につかないまま3年生になってしまったために、模試で合格圏と判定された大学を志望校にしたり、指定校推薦入試に頼ったりする生徒が少なからずいました」(横関先生)

そうした進路決定のあり方は、生徒の自信のなさの表れでもあると、教務主任の橋本晃一先生は指摘する。

「自分を過小評価している生徒が多いと感じます。能力が高くても、集団の中に埋没してしまい、その能力を開花させられないまま、

合格圏の大学に進学する。早くから高い目標を持って頑張ればもっと伸びると思うのですが、大学の情報が少ないこともあり、低学年時から難関大学を志望する生徒はほとんどいませんでした。1年生の時から視野を広げ、志を高めるような指導が必要だったのです」

1年次から志望校検討会を実施し 学年を引っ張る上位集団を育てる

改革は、教師の意識を変えることから始まっ



群馬県立桐生高校
横関素衛 よこせき・もとえ
教職歴36年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。「仕事も学習もやらされるのではなく、自分からやれば楽しくなり、成果も上がる」



群馬県立桐生高校
橋本晃一 はしもと・こういち
教職歴30年。同校に赴任して9年目。教務主任。「人前で愚痴はこぼさない、他人の悪口は言わない、笑顔を忘れない」



群馬県立桐生高校
阿左見充良 あさみ・みつよし
教職歴18年。同校に赴任して5年目。1学年主任。「着眼大局、着手小局」



群馬県立桐生高校
星野将志 ほしの・まさし
教職歴9年。同校に赴任して5年目。1学年担任。教育情報部。「生徒が自分の人生の主役として輝くためのサポートをする」

た。横関先生が赴任した10年度、3年生の志望校検討会を、11月の1回のみから、7月・11月・1月の3回に増やした。

「本校には、新採の教師や進学校での指導経験のない教師も赴任します。志望校検討会の回数を増やすことで、教師が生徒に適切なアドバイスをする力をつけるとともに、進路指導に必要な視点を共有しようと考えました」(横関先生)

7月の検討会では、担任が学習・生活面で気になる生徒について取り上げ、夏休みの過ごし方や今後の指導方針などを検討し、直後の三者面談の材料にする。この段階では、志望校と学力の差が大きくても、志の高さを前向きに捉えて、その差を埋めるために必要な学習方法をアドバイス。11月は直前の模試結果を踏まえて志望校を絞り、1月はセンター試験の結果に基づいて第1志望校への出願可否を検討する。

11年度には、1・2年生対象の志望校検討会も12月に始めた。11月の進研模試やスタディーサポートの結果、高校入試の成績も見て、成績上位層の志望や学力を引き上げる方策を検討する。

「学年団で上位層の生徒の情報を共有し、12月の面談で『もっと難関の大学を目指せる』と生徒に前向きなアドバイスをすることがねらいです。学年の核になる上位集団を形成することで、学年全体で高い目標に向かう雰囲気

気をつくりたいと考えました」(横関先生)

模試に向けた決起集会で 学習を楽しむ雰囲気をつくる

橋本先生が学年主任を務めた11年度の1年生では、県外の国公立大学にも目を向けてほしいと考え、1学期から「難関大志望チャレンジゼミナール」を実施した。難関国公立大学を志望する生徒を募り、大学の情報を提供し、大学の過去問題に取り組むことや模試の受験を勧めた。

「年数回、上位層を集めてセミナーを行ったところ、2年生になると自主的に入試問題を解き、教師に添削を求める生徒が現れました。なかには、卒業式後も学校に来て、個別学力検査の後期日程に向けて頑張る生徒もいました」(橋本先生)

13年度の1年生では、模試の成績優秀者を表彰した。単に成績優秀というだけでなく、「前回の模試から最も得点を伸ばした生徒」など、その時々で表彰の対象を変えするという工夫もした。同学年の担任だった現1学年主任の阿左見充良先生は、次のように述べる。

「本校は伝統的に生徒も教師もお祭り好き。そのため、7月模試の表彰式は、校長室で行い、担任全員が礼装で臨みました。演出により、模試に対する生徒の士気を高め、学年全体で頑張る雰囲気になったと思います」

16年度入試で東京大学や東北大学、横浜国立大学などに合格した生徒全員が、この1年生7月の模試で表彰を受けた者だった。当初は、群馬大学などの地元の国公立大学を志望していたが、表彰されたことで自信がつき、教師の励ましを受ける中で志を高めていったという。

学年で模試に作戦名をつけ、各学級でスローガンを掲げるという取り組みも、この学年が始めた。例えば、1年生11月模試は作戦名を「進撃の模試作戦」とし、各学級では「猪突猛進」「東男魂」といったスローガンを掲げた。中だるみが生じやすい1・2年生の2学期には、生徒の気持ちを引き締めるために、そのスローガンを幟に染め、体育館で「決起集会」を行った。

模試の分析を徹底的に行い、教科指導力向上を目指す

模試を教師の指導力向上に生かす取り組みも始めた。模試返却後、教科担当が「教科別模試分析表」に今回の成績、過年度比較・他校比較とその分析結果、分野別の課題や弱点、それらに対する打ち手などを記入。進路指導部が全教科・科目を一覧表(図)にまとめて、教師全員で共有する。

「模試を活用した教科指導力向上のためのPDCAサイクルを確立したいと考えました。課題を洗い出し、次回に向けた決意表明

をすることで、模試の結果をより厳しく見る意識が、教師間に定着したと思います。平均偏差値は、10年度は50程度でしたが、この方法を始めた後は55に伸びました」(横関先生)

模試分析は学年の教科指導方針を立てる際にも役立つと、1学年担任の星野将志先生は語る。「模試で英語に問題があることが分かれば、英語の課題を増やして国語や数学の課題は控えるというように、各教科が足並みをそろえて課題の配分を調整できます。模試を通じて、教科を超えて支え合う連帯感が醸成されたことも、大きな成果でした」

図 「教科別模試分析表」2015年度2年生7月進研模試

教科	過年度・他校比較、原因	分野別分析(好調・不調の原因)	具体的な対応策等
国語	53.8 (273人) ●対昨年 -2.1 対一昨年 +3.3 ●対A高校 +2.5 対B高校 -2.8 対C高校 -1.9 ●古典分野における得点率低下による最上位層の減少。古典の読解問題に取り組んだ経験値が不足していること、語彙力を高める学習が不足していることが一因と考えられる。	●総合成績はやや低下したが、前回までと同じく、すべての大問において全国平均を上回ることができた。 ●今回は現代文の上昇傾向が見て取れる。特に小説分野は県内トップグループの高校に肉薄した(平均点でD高校を上回った)。すべての成績層において、全国平均得点率を上回ったのは特筆すべき成果であろう。評論においてもよく健闘し、すべての層で全国平均得点率を上回るか、同程度の成績を残した。 ●しかし、前回までの「得意分	●現代文においては、これまで行ってきた授業、補習を通しての問題演習を継続する(特に論述の演習を中心に行う)。 ●古典においては、多くの文章に触れる、読む、問題を解く経験を積ませることを重視したい。 ●古文分野において、語彙の絶対数が不足している状況が顕著であるため、週1回の古文単語の小テストを行うことで語彙力育成に努め

*学校資料を基に編集部で作成

進路指導部と学年団が連携し、キャリア教育を体系化

12年度には、数々の進路学習や進路行事の中でも特に必要なものを進路指導部と学年団で精選し、3年間のキャリア教育プランを構築した。その際、各学年主任を進路指導部の所属とし、進路指導部と学年団の連携を密にした。

「学年主任が進路指導部にも入ることで、進路行事を学年団主導の学年行事にできます。学年団と進路指導部の意思疎通が格段に進み、進路指導部以外の教師も、キャリア教育に積極的にかわるようになりました」(横関先生)

各学年の進路行事は、学年主任が責任を持って実施する。例えば、2年生で行う大学教員の出張講義では、学年主任が学年団の教師に担当大学を振り分け、各教師が講師の派遣について大学と直接交渉する。また、全学年が対象の進路行事では、例えば、3年生の参加者が多い8月の学習合宿は3学年主任が担当するというように、参加生徒が多い学年の主任が進路行事の企画・運営を行い、他学年に参加を呼びかける。教師の意欲を引き出すために、進路行事の取り組み方は学年団に任せている。ただし、各学年のノウハウを共有する場合は充実させている。毎年5月に学年合同の職員研修を実施。前年度の3年生の進路実績(センター試験の結果、進研模

試の成績推移、学習時間の推移などを含む」を踏まえて、取り組み内容について当該学年の担当者が説明する。

「学年間の指導の平準化が主目的ですが、若手教師には重要な研修の場にもなっています。先輩教師がどのような取り組みをしてきたのか、具体的なエピソードを通して知るとで、進路指導のノウハウを整理することができました」（星野先生）

進路だよりやキャンパスツアーで 県外の大学を知り、視野を広げる

生徒の視野を広げるための取り組みも充実させている。13年度から横関先生が発刊している進路だより「上昇桐生」では、横関先生が訪れた大学説明会の内容やキャンパスの雰囲気などを紹介。毎年、国公立立を問わず10大学程度を取り上げ、大学説明会が多く実施される1学期に集中的に発刊している。

「地方の国公立大学出身の教師の中には、国公立大学の併願校になる私立大学についてあまり知らないケースもあります。生徒だけでなく、先生方にも大学について詳しく知ってほしいと、進路だよりを発刊しています」（横関先生）

15年度に始まった東北大学オープンキャンパスツアーは、主に2年生が参加対象だが、1年

生と3年生の希望者も参加でき、初年度は80人が参加した。行き先を東北大学にした理由は、同大学が全学部一斉にオープンキャンパスを行うことと、同校からバスで行ける国立の難関大学であることだ。

当日、生徒は会場となる4つのキャンパスに分かれて、講義体験や研究室訪問をしたり、同校卒業生の東北大生と交流を深めたりする。薬学部志望の生徒は、「今回、初めてほかの学部を見て、物理にも興味を持った」と感想に書いた。オープンキャンパスツアーに参加して、志望とは異なる学部・学科にも視野を広げる生徒も現れている。

一連の改革により、四国や九州などの遠方の

情熱 若手教師が語る、指導変革への

後輩教師が相談しやすい 雰囲気づくりを心がけたい

1学年担任 星野将志

本校に赴任して最初に課題に感じたことは、生徒の数学の応用力の不足でした。数学は私の担当教科ですが、前任の進学校では、生徒に教え過ぎないことを意識していました。しかし、本校の生徒の場合は、先を見通して問題に取り組むプランニング力が弱かったのです。そのため、説明を丁寧にすることで、生徒がより理解できるような授業を心がけました。

2016年3月には、1年生から3年間持ち上がった学年を初めて送り出しました。受験対策に入るタイミングが遅かったり、最後の詰めが甘かったりして、第1志望校に届かず、悔しい思いをした生徒もいました。この4月からは再び1年生を受け持っているのですが、この3年間の反省を踏まえて、生徒全員がそれぞれの志望を実現できるよう、大学入試への早めの意識づけと、集団で学習に取り組む雰囲気をつくっていききたいと思っています。

また、私は今年で教職歴10年目を迎えました。今までは先輩についていき、いろいろ教えてもらいましたが、これからは後輩の先生方に自分の経験やノウハウを伝えていくことを意識していかなければなりません。教師は「分からない」ということを口にしがらしいと思います。ですから、これからは後輩の相談に乗る立場として、分からないこと、不安に思うことをどんどん話してもらえるように声かけをしていきたいと考えています。

国公立大学を志望する生徒が増え、卒業生の進学先は多様になってきた。指定校推薦入試を希望する生徒は、改革前の約20人から、15年度は5人にまで減少。志を高く持って最後まで一般入試で頑張る生徒が増えている。

今後の課題は、学習時間の確保と学習の質の向上だ。

「2年生になると、学習時間が大きく落ち込みます。そうした中だるみの時期の意識を変えていくことで、生徒の学力はもっと伸びるはず。学習時間記録表の活用などにより学習量を確保しつつ、教師の指導力向上を通して授業の質を高め、進学実績をさらに高めたいと考えています」（阿左見先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2013年12月号指導変革の軌跡「[沖縄県立読谷高校](#)」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け



◎1925（大正14）年、松山美善女学校として開校、48年に松山女子商業高校、68年に聖カタリナ女子高校に改称。2012年度に総合学科を設置、16年度に男女共学となり、現校名に改称した。校訓は「誠実・高潔・奉仕」。ICT教育、グローバル教育などの改革を推進中。

設立

1925（大正14）年

形態

全日制／普通科・総合学科・看護科／共学

生徒数

約1130人

2016年度進路実績（現浪計）

国公立大は、岡山大、広島大、愛媛大、高知大、北九州市立大などに9人が合格。私立大は、早稲田大、立命館大、関西大、関西学院大、松山大などに延べ229人が合格。短大、専門学校、専攻科進学102人。就職は、67人。

住所

〒790-8557
愛媛県松山市藤原町468番地

電話

089-933-3291

Web Site

<http://www.catalina.ed.jp/>

愛媛県・私立

聖カタリナ学園高校

学校改革

学校の一体感を醸成し、 学び直しとICT活用で 教育力を高める

変革のステップ

背景

◎生徒数が減少して各学科の規模が小さくなったことを受け、3学科が連携し、学校としての一体感を出すことが課題に

STEP 1

実践

◎学科を超えて、学力を測る共通指標を設定。学び直しやICTの活用による教育力向上を図る

STEP 2

成果

◎2016年度の高校受験者数が前年度の約2倍に増加。教師の意欲が高まり、学校の一体感や学年団の団結も強化される

STEP 3

生徒減を機に、客観的な学力把握と 進路指導の体系化を推進

愛媛県松山市の中心部に位置する聖カタリナ学園高校は、商業系の女学校を前身とするカトリック系ミッションスクールだ。1990年代には、普通科、商業科（現・総合学科）、衛生看護科（現・看護科）の3学科合わせて、生徒数約2000人の大規模校だった。しかし、少子化や共学校人気などの影響で、次第に生徒数が減少し、2000年代の初めには1200人程度となっていた。06年度に赴任した芳野敬三校長は、当時の状況をこう語る。

「大規模校だった頃は、各学科がよい意味で競争意識を持ち、切磋琢磨する雰囲気がありました。しかし、生徒数が少なくなると、そのような雰囲気徐徐になくなり、3学科が連携し、学校としての一体感を高める必要がありました。それでも現状を検証せず、同じ教育を続けていたことが課題でした」

状況を打開するため、同校がまず着手したのは、客観的に生徒の学力を把握することだった。

「教師一人ひとりが学校全体を見渡す視点を持つために、学科を超えて生徒の学力を測る共通の指標が必要でした。生徒の学力をきちんと把握することが、課題に対応した教育内容、指導体制を構築する第一歩になると考えたのです」（芳野校長）

同校は、07年度、ベネッセの「基礎力診断テスト」(*1)を導入した。結果は進学課が取りまとめ、各学科のGTZ(*2)を過年度や学科・コース間で比較できるようにした。当初、看護科は導入をためらっていたが、他学科のデータを見て学力把握の必要性を感じ、翌年から同テストを実施。Dゾーンの生徒の数が明らかにになり、漠然と感じていた学力低下が浮き彫りになった。これで、全学科で教師が学力を切り口にした生徒の実態について議論できる環境が整った。

08年度には、年間進路指導計画の作成に着手



芳野敬三 よしの・けいぞう
聖カタリナ学園高校校長
教職歴41年。同校に赴任して11年目。「信望・愛・生徒の力を信じ、生徒の成長を望み、生徒に愛情を持って接する」



横山博文 よこやま・ひろふみ
聖カタリナ学園高校教頭
教職歴25年。同校に赴任して26年目。総合学科長兼任。「思いを形にするには勇気がいる。教師に必要なのは言葉に出す勇気、行動する勇気」



平原澄夫 ひらはら・すみお
聖カタリナ学園高校
教職歴21年。同校に赴任して22年目。普通科長・英語科主任。ICTグローバル教育推進責任者。「常にスピード感を大切にして職務にあたる」



國本優香里 くにもと・ゆかり
聖カタリナ学園高校
教職歴3年。同校に赴任して4年目。国際教育室・ICT推進委員。「様々なことに挑戦しようとする生徒をしっかり支えられる存在でありたい」

した。横山博文教頭はその意義をこう語る。

「本校では、進路指導は担任に任ざれており、進路行事や進路学習の体系的なカリキュラムがなかったため、よい取り組みがあっても次の学年に継承されにくい状況でした。進路指導を体系化することで、どの時期に何をすべきかが一目で分かるようになり、教師の

進路指導への意識が大きく変わりました」

同校の進路指導の特徴は、高校での学習・生活に対する意識調査の結果をグラフにした「生徒の意欲曲線」を参考に、生徒の学習意欲が下がる時期に進路行事を配置していることだ。例えば、体育祭後の1年生9月には、文理選択を見据えた進路研究を行い、気持ちを引き締める。2年生12月の期末考査後には、大学の個別相談会を実施し、生徒の意識を受験へと切り替えられるようにしている。教師が他学科の様子も把握できるように、3学科の取り組みを1枚のシートにまとめた点も工夫の1つだ。

確認テストと補習で 基礎・基本の定着を図る

「基礎力診断テスト」の結果から、国語・数学・英語の基礎学力向上が課題であることが明らかになり、09年度、「総合的な学習の時間」で学び直しに着手した。教材は、1年目は教科担当者が作成した小テストを用いたが、作問や結果

分析の負担が大きかったため、2年目からベネッセの「マナトレ」(*3)を採用した。

「『マナトレ』で、生徒の自学自習による学び直しのスタイルが確立しました。しかし、事後の復習も生徒に任せていたため、生徒のつまづきを担任と教科担当者が把握しきれておらず、フォローが不十分でした」(横山教頭)

そこで、12年度の総合学科設置を機に、「マナトレ」を活用した基礎学力向上策を改善した。まず、「マナトレ」の級ごとに確認テストを実施。合格点に達しなかった生徒には、土曜補習に参加させることにした。補習では、生徒は教科担当から解説を受けた後、補習プリントに取り組む。これは、教科担当者が「マナトレ」の級に準じて問題の難易度を設定して作成したプリントだ。生徒は、その補習プリントを理解できるようにするまで指導を受け、スモールステップでの弱点克服に努める。

補習の各教室には教科担当者と担任がつき、チーム・ティーチングで生徒個々に丁寧に指導する。実施後、教科担当者が出席状況や解説した内容、生徒の取り組みの様子などを「マナトレ確認テスト 実施報告書」(P.36図)に書き込み、担任に渡す。担任はこれを見て、生徒の学習状況をつかみ、課題があれば教科担当者と対策を立てる。そうした結果、「マナトレ」のどの級の確認テストでも、合格率が8割を超えるようになり、D3の生徒が急激に減少したという。

*1 GTZ (学習到達ゾーン) という指標で生徒一人ひとりの基礎学力の定着度と学習力、コミュニケーション特性(自我同一性)を測る、ベネッセの生活・学習指導用テスト。*2 学力到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の評価指標。「S1」～「D3」の15段階があり、基礎力診断テストでは、そのうち「A2」～「D3」で評価される。*3 ベネッセの教材の1つ。学習力を身につける、小・中学校範囲の学び直し専用のプリント教材。

図 「マナトレ確認テスト 実施報告書」

マナトレ確認テスト 実施報告書						
期 日	期 日	期 日	期 日	期 日	期 日	期 日
実施日	4/4	4/4	4/4	4/4	4/4	4/4
出席生徒数	30	30	30	30	30	30
G1	7	17	22	23	26	32
G2	5	12	14	19	27	28
G3	11	22	23	24		
G4	11	24				
G5	5	11	19	22		
G6	17	26				
G7	6	12	14	19	25	34
G8	26					
欠席生徒数	3	3	3	3	3	3
G1						
G2						
G3						
G4						
G5	27					
G6	7					
G7						
G8	11					
【使用教材】						
マナトレ数学8版おかわりプリント、練習プリント・問題						
【実施報告】						
自作した補講用プリントを配布し、前巻と順と大きく3つに分けてポイントと解説をした後、教員3人で机回り指導を行った。補習になった生徒の多くが、授業中の小人数の指導の指導であったため、主体へのポイント解説だけで問題が解けるようになるとも多かった。小人数への指導の機会の多い生徒や小人数の指導について不安が残る生徒については、机回り指導で教員が個別に解説している。改善が求められた補習の不合格者に対しては、8版おかわりプリントを課題として与え、来週日に提出するように指導した。また、欠席者に対しては再試不合格者と同様の課題を与え、来週日に提出するように指導した。						

補習での生徒の学習状況を担任に報告し、その後の指導に生かす。
*学校資料をそのまま掲載

毎時間の情報共有で 指導の質の担保を図る

総合学科設置については、若手教師を中心とする各教科の代表、管理職から成る「カタリナ24委員会」で議論した。当時の学科構成は、就職希望者の多い商業科がある一方、普通科の中にも就職に対応する総合進学コースがあり、各学科・コースのすみ分けが明確ではなかった。

「開校以来の伝統のある商業科の改組には、ためらいがありました。しかし、3学科の中で、商業科の受験者数が最も減っているのも事実でした。伝統ある商業教育や普通科総合進学コースの福祉系科目など、多様な教育資産を生かすためには、総合学科の設置が最良であるという結論に達しました」（横山教頭）

康福祉など7系列）の研究を行った。

授業前には学年団で、授業ごとに作成する指導案を基にミーティングを行い、授業後は振り返りを行う。「この部分の説明が足りず、生徒の気づきを促せなかった」「前向きな気持ちを引き出す声かけが不十分だった」など、次の授業に向けた目線合わせを行う。

「効果的だった点、不十分だった点を共有し、検討するなど、足並みをそろえることは、学年団の一体感を醸成すると同時に、指導力を高めるためにも欠かせません」（横山教頭）総合学科の担任を経験した國本優香里先生は、次のように語る。

「自分にはできない』『やりたいことが見つからない』という生徒も少なくありません。総合学科を受け持つ際は、生徒に自信を持たせ、前向きに進路を切り開いていく力を引き

出すことを意識しています。学年団での情報共有会は、生徒への声かけの内容や課題の取り組ませ方など、ほかの先生の指導を知ることができる貴重な場になりました」

教育のICT化を組織的に進め、 教育力の向上を目指す

15年度、同校は創立90周年を迎え、100周年に向けた新たな改革に乗り出した。柱の1つは、16年度の共学化（看護科は除く）に向けた環境整備だ。管理職と各分掌の代表による「カタリナ28委員会」を設置し、全国の先進校を視察して共学化に向けたノウハウの蓄積に努めた。

もう1つは、魅力ある授業づくりのための教育のICT化だ。15年3月、普通科長の平原澄夫先生が学校の意思決定機関である運営委員会（委員長は芳野校長）に、普通科でのICT教育の実施を提案。10日ほどでベネッセの「Classi」(*2)の導入が決定し、4月下旬の職員会議で公表され、6月にはタブレットが整備された。「学校改革にはスピード感が大切です。16年度の生徒募集に向けて、ICT化のメリットを正確に伝えるためには、ただ『やります』と言うだけではなく、前年度中に校内に浸透させておく必要がありました」（平原先生）教師全員にICT教育の浸透を図るため、校内研修の体制も工夫した。ICTに精通してい

る教師5人をICT推進委員に任命し、さらに、教科指導推進チームとClassi推進チームを結成した。各教科1人、計13人による教科指導推進チームは、授業のICT化の状況把握、デジタル教材の活用事例の研究などを行った。Classi推進チームは、全学年団から7人を選出し、「Classi」を活用した学習指導や生徒把握、情報共有などの方法を探った。ICT推進委員が研修の計画・運営と両チームの取りまとめを行い、研修で両チームが検証の成果を報告した。

「ICTの研究授業には40人近くの教師が参加するなど、どの教師も積極的に取り組んでいます。あと数年で定年退職というベテラン教師も含め、全体の半数以上の教師がICTを活用した授業を行っています。多忙感はあるかもしれませんが、学校が地域から注目を集めていることに対してやりがいを感じているのではないですか」（平原先生）

「Team T28・W28」で 成績上位層を伸ばす集団づくり

共学化を迎えた16年度、新校舎が竣工した。60年前に校地が分かれて以来、再び全学科が1つの敷地に集まり、設備面でも学校の一体感を担保する環境が整った。

普通科の特別進学コース（2年次に特進アカデミックコースか特進国際コースを選択）では、

新たな活動が始動した。成績上位層の育成を目指す「Team T28」「Team W28」だ。「Team T28」は、東京大学・京都大学・医学部医学科などを目指す集団づくりを目的とし、特進アカデミックコースを対象に、数学の早期補習や進学ガイダンスなどで学力、進路意識の向上を図っている。一方、「Team W28」では、長期留学生や海外大学への進学希望者の増加を目指す。1学期のガイダンスで特別進学コースの生徒に国内大学と海外大学との違いを説明し、特進国際コースの2年生の授業では、ベネッセの「オンライン・スピーキング・トレーニング」（*3）を導入した。これは、対話形式のトレーニングのため、リスニング力・スピー

キング力の向上が期待できる。今後の特別進学コースでは、「Classi」のグループ機能を使って、さらに集団力を高めたいという。

同校への地域の期待と評価は高まっている。16年度入試の受験者数は前年比の2倍となり、入学者も200人以上増え、男子1期生の入学者は目標を大幅に超える107人に達した。改革の成果を実感しながらも、同校に慢心はない。

「改革は進行中です。今は過去の成果を振り返るよりも、スピード感を持って走り続けていくことが大切です。課題は、成績上位層の生徒を安定的に確保すること。教育の質、教師の指導力のさらなる向上に努めて、校外にアピールしたいと思います」（平原先生）

情熱 若手教師が語る、指導変革への

生徒とともに 夢を探す存在でありたい

国際教育室、ICT推進委員 國本優香里

着任3年目の2015年度に、校内のICT教育を取りまとめるICT推進委員に選出されました。教職経験の浅い私に、ICT化のかじ取り役が務まるのかという不安もありましたが、学校に貢献したいという思いもあり、引き受けました。普段は教科指導や生徒指導の面でアドバイスをいただいているベテランの先生方から、デジタル教材や「Classi」の使い方について質問されることが多くなり、頼りにしていただけることにやりがいを感じています。

本校には、自信があまりない生徒が多いと感じています。進路学習に取り組んだ時には、どうすれば夢を持てるようになるのか、背中を押してあげることができるのかということを第一に考えました。「進路ノート」に「どうせ自分なんて」というコメントを書く生徒には、前向きに自分自身を見つめられるように、様々な角度から問いかけました。生徒が書いた感想や決意表明に、1人20分くらいかけてコメントを書いたこともあります。

16年度には、「Team T28・W28」など新たな取り組みが始まりました。成績上位層の生徒たちが難関大学に合格できるしっかりとした指導力を身につけることが、現在の目標です。私は比較的、生徒と年齢が近く、身近な存在だと思うので、生徒とできるだけたくさん話し、彼らの悩みを受け止め、一緒に夢を探し続けていきたいと思っています。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2013年10月号指導変革の軌跡「石川県・私立北陸学院中学・高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け

*3 インターネットのテレビ電話を使い、ネイティブスピーカーと1対1で英会話の練習を行う、ベネッセが提供するサービス。

ビフォー
アフター

行事振り返りシート

自校の指導ツールを他校の教師とともに検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。
今回は、体育祭や文化祭など生徒主体の行事での成長を生徒自身が振り返るための「行事振り返りシート」について検討する。

検討会メンバー



岡山県・私立
岡山中学校・高校
鷺見香織
すみ・かおり

教職歴16年。同校に赴任して11年目。高校3学年主任。「人に優しく、己に厳しく、勉強はたゆみなく」。



愛知県立
東海商業高校
新美廣勝
にいみ・ひろかつ

教職歴24年。同校に赴任して2年目。進路指導主事。「自分への自信と母校への誇りを持った、社会に愛される生徒を育てたい」。



福岡県立
東筑高校
辻本貢士
つじもと・こうし

教職歴18年。同校に赴任して8年目。キャリア教育部進路指導班主任。「生徒たちは鏡である。我々の学びへの姿勢が常に問われている」。

検討

仲間との協働の視点を大切にし、
自身の成長を深く自覚させたい

鷺見 本校の生徒は、行事の感動を、振り返りシートに真摯に書き

込みます。せっかく素晴らしい言葉が生徒からあふれているのだから、それを**行事後の生徒の行動にもっと還元させたい**と思っています。行事

が終わると、学習へと素早く気持ち切り替えることが求められますが、行事で得たそれぞれの気づきを、その後の高校生活に生かせるようなシートにしたいです。



新美 仲間の姿を通して自分を振り返らせようというのはとてもよ



辻本 なぜ、あの人はそんな行動をしたのか、自分ならばどう行動したかと、自分と他者を置き換えながら自分を見つめることは大切です。

また、仲間のよいところを実際に言葉にすることは、クラスに対する信

頼感の醸成につながるでしょう。

鷺見 他者の視点で自分を見ること、つまり自己を対象化する力は、行事や教科学習など、高校での様々な活動を通して身につけさせたい力です。

辻本 よりよい対象化のためには、ただ感覚的に周囲と比較するだけでなく、**そもそもこの行事で自分はどうな成長を目標にしていたのかを考えることが重要**ですよ。目標は、生徒の興味・関心、与えられた役割、立場によって異なります。行事前に自分の目標を確認させ、さらに振り返りシートを事前に配って、生徒に振り返りの観点を示しておくとういと思っています。振り返りを充実させるためにも、事前指導にもひと工夫したいですね。

岡山県・私立岡山中学校・高校 鷲見香織先生 「行事振り返りシート」

自分の成長を振り返らせるのが（３）の項目だが、生徒の中には多様な経験をしているにもかかわらず、自分を肯定することをためらい、「特になし」と答える者もいるという。そのため、あえて他者の視点を持ち込み、聞いているのが（５）だ。

ねらいと機能

「自分自身」「仲間」の２つの視点で
行事での成長を振り返らせる

一つひとつの行事において、「面白かったか」「盛り上がったか」だけでなく、行事を通してどう成長したのかまで自覚させるため、「自分自身」「仲間」の２つの視点で振り返るシートを運用している。「自分自身編」では、できるようになったことなどを振り返り、「仲間編」では、仲間のよかったところを見つけるとともに、自身のチームへの貢献内容を分析する。この振り返りを、行事後の高校生活の充実につなげることが今回のテーマだ。

■自分自身編

文化祭・体育大会を振り返る

【自分自身編】
あなた自身は今年度の文化祭で、どのようなことをしましたか？（クラス参加や部活動での役割・委員長での働き）

（体育大会で、どのようなことをしましたか？）

（１）文化祭・体育大会を通じて「仲間・仲間外れ」、印象に残っていることありますか？

（２）悔しかった瞬間、自分自身を悔いなく感じた瞬間はいつ、どんなことですか？

（３）自分が活躍（活躍）できた瞬間はいつですか？どんな力を発揮しましたか？

（４）文化祭・体育大会後の自分、これまでの自分と、何が違いますか？

（５）行事を通じて誰かに支われて嬉しかったこと、意欲だったことはありますか？

仲間編では、自分が所属した集団の特徴や、その集団の中での自分の役割を振り返らせる。（５）では担任がホームルームなどで語った言葉、クラスの目標や理念を踏まえたことを書く生徒がどれだけのかを、鷲見先生は特に注目するという。

ビフォー

■仲間編

【仲間編】
（１）「準備」「運動中」「片付け」「その後」にわたって、誰が最も活躍していた？聞いていた！思っていた！だけ、実は違っていた。その人を教えてください。

（２）よほどに、こういう活動は頑張った方が良くなると思ったのは、どのような「ふたつ」ですか？

（３）仲間の中で、自分はどんな役割を果していましたか？

（４）ホームルームや部活動で協力して、お互いの成長を促すためには、どのようなことが大切ですか？

（５）ホームルームでは、これから、どんなチームに成長していってほしいと思いますか？そのために、あなたは何をしますか？みんなは、どんなことを覚えるべきですか？

課題と解決策

3

振り返りシートの項目を事前に示すことで、行事での成長はどんな観点で確認できるのかを生徒が理解し、行事への取り組みがより充実する。

2

各行事でどのような目標を掲げ、どのような成長を期待するか、生徒が事前に言語化する機会を設ける。

1

他者の行動を振り返りながら、自分の成長を掘り下げていく機能は今後も持たせたい。

新美 事前に振り返りシートを見せることで、「これから取り組む行事には、こんな観点が必要なのか！」と気づかせることができますね。「行事を振り返って気がついたこと」といった大きなテーマで振り返らせると、きちんと内省できる生徒もいれば、「まずこれをした、次にこれをした」といった経過報告に終始する生徒もいます。**生徒に気づきを促すような教師の誘導的な項目の設定が必要です。**

鷲見 生徒によって、自分が求めるものと周囲から期待される役割が異なる場合があるからこそ、自分の成長をきちんと評価できるよう、意気込みや期待する自分像を言葉にさせることは確かに大切ですね。

学校プロフィール

岡山県・私立岡山中学校・高校

◎全日制／普通科／共学／1学年約150人
◎2016年度入試合格実績（現浪計）／国公立大は、北海道大、東京工業大、大阪大、岡山大、九州大などに42人が合格。私立大は、上智大、早稲田大、同志社大などに延べ111人が合格。

愛知県立東海商業高校

◎全日制／総合ビジネス科・情報科（1年次は両科共通のカリキュラム。2年次より分かれる）／共学／1学年約320人
◎2016年度進路実績（現役のみ）／4年制大学進学41人、短大進学19人、専門学校進学69人、就職180人。

福岡県立東筑高校

◎全日制／普通科／共学／1学年約320人
◎2016年度入試合格実績（現役のみ）／国公立大は、東京大、京都大、大阪大、九州大などに216人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ230人が合格。

検討会で明らかになった課題を踏まえ
「行事振り返りシート」を改良！
次ページで紹介します。

アフター

行事振り返りシート

____年 ____組 氏名 _____

行事の前に記入

学年や
クラスとしての目標①を達成するための
自分の発揮したい力
や意気込み

①

②

行事前に目標や意気込みを書かせる。この時、担任が「この学年における行事の意味（前年度との違い）」をメッセージとして①に明記すれば、生徒はより具体的に目標をイメージできる。

「仲間」から考えてみよう

①で書いたことはどのくらい達成できただろうか。みんなで頑張ったこと、できたことを思い出しながら、達成度合いを考えてみよう。

準備から活動、そして片づけまで、「頑張っていた」「輝いていた」「みんなを支えていた」という人を挙げよう。

名前	頑張っていたこと
	さんが
	さんが
	さんが

学年やクラスの仲間たちと一緒に活動する中で、自分自身について気がついたこと、考えたこと、悩んだことを書こう。

今回の経験から学んだことは、これからの自分の生き方、学び方、働き方などにどんな影響を与えるだろうか。考えてみよう。

〈生徒が記入〉

「自分自身」から考えてみよう

②で書いたことはどのくらい達成できただろうか。自分が頑張ったこと、できたことを思い出しながら、達成度合いを考えてみよう。

左に挙げた仲間たちと、その時の自分を比べて、「同じだな!」と共感したり、「ここは自分と違う!」と思ったりしたことを書こう。

仲間と自分を比べて考えたこと

振り返っている中で気がついた「自分の持っている強み」「今後伸ばしていく余地がある（伸び代がある）力」はどんなものだろう。

〈教師が記入〉

自己を対象化しやすくするために仲間（他者）と自分の行動力を比較しながら振り返りができるよう、「自分自身編」と「仲間編」を1枚のシートにおさめ、横並びにした。

今回学んだことが今後どう生きていくか、生徒に書かせると同時に、教師が1人の社会人、人生の先輩として、生徒が得た力が今後どう生きるかをメッセージとして書き記し、生徒にフィードバックすることもできる。

改訂後のねらいと機能

目標を明確にした振り返りで
3年間のつながりも強化

振り返りシートの一冊の大きな改訂は、行事の前に生徒個々に目標を設定させるといった点だ。学校や学年、クラスの目標を踏まえた上で、一人ひとりに発揮したい力や、意気込みを書かせる。目指す自分像を明確にしておくことで、行事後の振り返りをより客観的なものにするができる。「目標がしっかりと定まっているからこそ、行事がやりやすくなるから、3年間を通して試行錯誤しながら生徒が成長できる」「振り返りシートを3年間活用することで、前の学年の経験も踏まえて、次年度、生徒は新たな目標を設定できる」と検討会の先生方で意見がまとまった。

また、シートの機能が向上するほど、面談の重要性が高まってくるという指摘もあった。特に3年生は、受験校決定の話だけでなく、行事での生徒の成長を少しずつ会話に組み込むように学年団で共有しておけば、「行事での成長を先生は見てくれている」と、受験本番に向けた信頼関係の醸成につながることも期待できる。



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<http://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け→生徒指導・進路指導ツール集」でご覧ください。

活用

自己を対象化するために
行事の目標を個別に設定させる

驚見 文化祭や体育祭などでは、生徒会が主導してテーマを決めています。そのテーマを個々の生徒

がさらにブレイクダウンして、行事で発揮したい力や行事への意気込みとしてあらかじめ目標設定させてみたいのです。例えば、「今年の体育祭のテーマは『壁を越えろ!』だけれど、自分にとって、『壁を越える』とはどういうことだと思う?」などと問ひかけ、生徒に自分像を語らせることから始めるのです。



辻本 行事では、毎年同様の趣旨のテーマが掲げられることもあり

ますが、学年によって、またクラスの状態によってそのテーマの受け取り方は異なりますし、体育祭や文化祭も3年間繰り返すことで、高校生としての成長が完成に近づくわけですね。各学年における行事の意味を担任が自分の言葉で語ることは、生徒が目標を具体的に設定するために欠



新美 前年度の行事で、先輩がどんな感想を持ったのかを見せるこ

とも、生徒個々の目標設定の参考になるでしょう。生徒にとっては、先輩や同級生の言葉は、思考を深めるときかけとしてとても有効です。その意味では、1人で考えて記入するだけではなく、グループで話し合うことで他者の視点の持ち方を学ぶことができ、より深い振り返りが可能かもしれません。

驚見 行事を通して自分

で気づいたことだけでなく、仲間と振り返る中で気づくこともありそうですね。自分の気づきと仲間から得た学びを関連づけ、自分自身を掘り下げやすくする構成を考えたいです。その中でも、自分を肯定する要素を大切にして、その後の学習や



進路選択につなげさせたいです。

辻本 肯定感を大切にしたり振り返りシートならば、教師は「今伸びている」という生徒を見つけやすく、成長を後押しする面談のチャンスが増え、教師の喜びも大きくなります。

新美 本校では、行事での成長が社会でどう生きるか、採用面接を想定して語らせていますが、生徒がどんな部分に肯定感を持っているのかを把握することで、面接も一層充実するでしょう。

辻本 時には、「社会でどう役立ちそうか」と尋ねられた時、「こう答えれば先生は満足するだろう」とあたり障りのない答えでその場を乗り

切ろうとする生徒もいるでしょう。

生徒がそのように小さくまとまろうとしている時こそ、「こんな考え方もある」と教師が別の角度から刺激することも大切です。生徒が書いた内容に一言でも教師からのコメントを返すようにしたいですね。

驚見 行事が終わったら、行事のことはすべて忘れて気持ちを切り替えさせようとしたこともかつてはありました。しかし今は、得たこと、成長したことを対象化しながら整理した方が、結果的にスムーズに次の行動に切り替えられるように思います。成果を未来につなげる振り返りを、校内でさらに検討します。

活用の流れ

- 1 行事前に、今年度のテーマや教育目標を示した上で、生徒個々の発揮したい力や意気込みなど、自分の目標を書かせる。

- 2 行事後に、他者(仲間)と比較しながら振り返り、自己を対象化する。

- 3 振り返らせた内容を踏まえ、今後の展望を書かせる。教師は、生徒個々にフィードバックする。

地域と協働しながら、 地域再生・地方創生に貢献できる 知識・技能・意欲を育む

（千葉大学 ● コミュニティ再生ケア学、地域産業イノベーション学）

千葉大学は、地域社会の活性化に貢献する人材の育成をねらいとして、2015年度に「コミュニティ再生ケア学」、16年度に「地域産業イノベーション学」という全学共通教育プログラムを始めた。科目を「講義型」「講義・体験型」「PBL・実習型」に種別して体系化し、講義で得た知識・技能を地域で実践し、体験的に学べるというカリキュラムが特徴だ。市民と学生が一緒に行う体験学習や、NPO・自治体の協力による地域体験活動など、学生が地域で学び、地域について深く考える場を、地域と連携して多く設けている。

地域貢献について体系的に学べるプログラムを開始

国は、「地域再生」「地方創生」を掲げて、日本全体の活力を高める政策に力を入れている。その一環として始まったのが、文部科学省の「地（知）の拠点整備事業（COC、*1）（2013年度〜）、及び「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）（15年度〜）」だ。大学が有する資源を生かして地域社会に貢献するとともに、地域社会の変革を担う人材の育成を後押しするという事業である。

その2つの事業に採択された千葉大学は、地域社会の活性化に教育・研究・地域貢献の分野で総合的に取り組んでいる。事業推進のため、13年度には、「コミュニティ・再生ケアセンター（現コミュニティ・イノベーションオフィス コミュニティ再生ケア部門）」を設置した。同オフィスは、地域イノベーション部門長で、事業申請の取りまとめ役を務めた国際教養学部の鈴木雅之准教授は、センターの主な役割を次のように話す。

「以前から、地域に積極的に出て、



千葉大学国際教養学部准教授
鈴木雅之 すずき・まさゆき
コミュニティ・イノベーションオフィス
地域イノベーション部門長。

地域の課題解決に住民と一緒に取り組む教員はおり、その教員の研究室に所属する学生は教員と一緒に地域に出て活動しています。そのように、地域貢献を行うのと同時に、学生が地域で学べる場を創出する動きを全学で進めようと、各教員の持つシーズ（資源）と、地域のニーズ（課題）をつなぐ体制を整えました」

主専攻と並行して、地域貢献の 土台となる力を身につける

15年度の普遍教育課程（*2）のカリキュラム改訂時には、必修科目群「地域と暮らし」を新設した。これは、「社会の一員として、地域とかわりながら、課題を主体的に設定し、解決するマインドを持つ人材」を育成するために設けられた科目群で、16年度は「団地再生まちづくり」「地域振興とデザイン」など20科目

*1 Center of Community の略。

*2 千葉大学では全学共通教養教育を「普遍教育」と呼んでいる。

図1 「コミュニティ再生ケア学」「地域産業イノベーション学」の概要

	コミュニティ再生ケア学	地域産業イノベーション学
目指す人材像	地域志向のプロフェッショナル 地域づくりのスペシャリスト	産業振興のプロフェッショナル 地方創生のスペシャリスト
ねらい	学生の主専攻である学部でのそれぞれの専門性を持ちながら、地域・コミュニティに関する幅広い教養と、地域再生の知識・技能、実践力を備え、NPO、企業、自治体などそれぞれの立場で地域再生のために活躍できる人材を育成する。	学生の主専攻である学部でのそれぞれの専門性を持ちながら、地域産業やイノベーションに関する幅広い教養と、地域再生の知識・技能、実践力を備え、大学、自治体、企業などの立場から地域産業をイノベーションする人材を育成する。
履修単位数	本プログラムの履修登録をした上で、普遍教育科目や専門教育科目として指定された科目の中から23単位を取得すると、履修証明書（サティフィケート）を発行。	本プログラムの履修登録をした上で、普遍教育科目や専門教育科目として指定された科目の中から30単位を取得すると、履修証明書（副専攻）を発行。
職業イメージ例	公務員、医療・福祉従事者、エンジニア、教員、地域企業、シンクタンク、コンサルタント、地域・都市づくり、研究者、CB／SB（※1）起業、まちづくりの会社・NPO	公務員、シンクタンク、6次産業化（※2）プランナー、コンサルタント、地域企業、研究者、ベンチャー起業、まちづくりの会社
事業協働	大学	敬愛大学、千葉科学大学、千葉工業大学、聖徳大学短期大学部、放送大学、城西国際大学、日本大学生産工学部、木更津工業高等専門学校
	自治体	千葉県、横芝光町、いすみ市、勝浦市、銚子市、館山市、南房総市、長柄町、御宿町、木更津市、鴨川市、東金市、山武市

※1 CBはコミュニティビジネス、SBはソーシャルビジネスの略。地域社会の課題解決に向けて、住民、NPO、企業などが協力し、ビジネスの手法を活用して取り組むこと。

※2 第1次産業である農林水産業が、生産・加工（第2次産業）・流通販売（第3次産業）との一体化や、観光農園のようなサービスなどを行うこと。

*同大学の資料を基に編集部で作成

が開講されている。そのようにして、全学生が在学中に一度は地域社会に関して学ぶ機会を設けた。

さらに、地域活性化に貢献する人材の本格的な育成に向けて、15年度にスタートさせたのが、全学共通教育プログラム「コミュニティ再生ケア学」だ（図1）。これは、地域再生やコミュニティづくりを行うための知識・技能、実践力を育むことを目的としたプログラムで、指定された

科目の中から23単位を取得すると、履修証明書が発行される。

そして、続く16年度には、同じく全学共通教育プログラムの「地域産業イノベーション学」を始めた（図1）。このプログラムは、地域社会に関する課題の中でも、地域産業を活性化させ、雇用を新たに創出するようなイノベーションを起こすための知識・技能、実践力を身につけることを目的としている。こちらは、指

定された科目の中から30単位を取得すると、履修証明書が発行される。

両プログラムとも、学生は、主専攻となる所属学部・学科で自身の専門性を高めながら、普遍教育科目や専門教育科目としてプログラムで指定された科目を履修し、地域社会または地域産業の基礎、そして、地域社会の課題を把握する手法や地域社会への入り方、住民とのコミュニケーション

ションの取り方などを学ぶ。

「高い専門性があっても、地域社会の実情を知り、何が課題であるかをつかめなければ、その力を有効に発揮できません。また、活動を進めるためには、地域の人たちから信頼を得ることも大切です。この2つのプログラムは、そうした地域社会で活動するための土台を身につける内容となっています」（鈴木准教授）

多彩な実習科目で、地域活動を体験的に学ぶ

両プログラムの特徴の1つは、普遍教育科目を「講義型」「講義・体験型」「PBL・実習型」、そして専門教育科目と種別して必要単位数を設定し、体系的に学べるようにしていることだ（P.44図2）。それぞれに多様な科目を履修科目に指定しており、学生は自身の関心に応じて選択できる。

「講義型」「講義・体験型」の科目は、学生の意識を変える役割が大きいと、鈴木准教授は語る。

「多くの学生はそれまで地域社会とかかわった経験がほとんどなく、地域社会がどれほど危機的状況にある

のかをあまり知りません。そこで、例えば、私の担当科目『千葉の地域を知る』では、千葉市長や松戸市長、柏市長、千葉県内10地域の地域振興を担当する県庁職員にお願いし、千葉県の問題やポテンシャルなど、地域の状況を率直に伝え、課題意識を掘り起こしています」

この科目を、プログラムの履修登録をしていない学生が1年生の時に受講し、千葉県の地域社会の実態に衝撃を受けて、2年生から履修登録をするケースも多いという。

工学部メデイカルシステム工学科

3年の根本卓也さんは、2年生の時に鈴木准教授担当の「地域再生学」(※1)を履修して、地域社会での活動に対して認識が変わったと語る。

「地域社会の取り組みというところ、住民の寄り合い的な活動という印象がありました。しかし、授業で、NPOは補助金や寄附金で運営されることが多く、明確な活動報告書を出すことが大切であると知り、成果が厳しく求められるものなのだと、考えが改まりました」

学生と住民と一緒にアイデアを出し合う

学生が地域に出て、住民と一緒に活動する実習科目が充実していることも、両プログラムの特徴だ。「PBL・実習型」には4つのカテゴリ(図2)があり、どの科目も単発のイベ



大浜美咲 おおはま みさき
千葉大学法政経学部法政経学科3年
コミュニティ再生ケア学履修生。
埼玉県立大宮高校卒業。



根本卓也 ねもと たくや
千葉大学工学部メディアカルシステム工学科3年
千葉県立船橋高校卒業。

ント的な内容ではなく、じっくり実習できるカリキュラムになっている。

その中で、特色ある科目が「カレッジリンク・プログラム」(写真1)だ。学生と地域住民がともに学ぶ集中講座(※2)で、柏の葉キャンパスで始まり、西千葉キャンパス、廃校の小学校を利用したサテライトキャンパスで開講している。法政経学部法政経学科3年の大浜美咲さんは、2年生の時に「創造性をみがいて日常を豊かに」を履修した。毎回、音楽や美術、食などの専門家を迎え、新しい着眼点や発想を体験形式で学ぶという内容だ。

「履修している学生の所属学部は異なり、参加住民の年齢もばらばらでした。そうした様々な背景を持った人たちが出すアイデアを見ると、1つの物事に対してこんなにも異なる見方があるのだと実感しました」

NPOで行うイベントの企画・運営を企業とも連携して進める

「地域活動体験」(写真2)では、派遣先のNPOが多種多様であることも特徴だ。

「対象年齢は幼児から高齢者まで、

図2 「コミュニティ再生ケア学」のカリキュラム概要

科目種別				授業の概要	必要 単位数
普通教育科目	必修	講義型	地域と暮らし	地域とは何か、地域にある課題、解決事例などを学ぶ。	1
		講義・ 体験型	地域（再生）の基礎	自らが地域の課題を解決する力を身につけるために必要な基礎的な考えを学ぶ。	4～10
	地域（再生）に関する多様な分野・テーマ		地域にある様々な分野の課題、解決方法を、その専門分野の教員から学ぶ。	2～4	
	地域（再生）に資するスキル		地域・コミュニティの課題を解決するために必要なスキルを身につけるための入門編。	2～4	
	選択	PBL・ 実習型	PBL(プロジェクト・ベースト・ラーニング)	学生自らの提案により活動テーマを設定し、活動計画を立て、実践する。	2～6
			カレッジリンク・プログラム	学生と市民と一緒に受講し、課題解決のプログラムなどに協働しながら取り組む。1回3時間程度で、全5～6回の集中講座。	
			地域活動体験	千葉県内のNPOで50時間以上地域活動を行う。事前・事後学習も義務づけられている。	
			インターンシップ	自治体・企業・団体等で、40時間以上のインターン研修を行う。事前・事後学習が義務づけられている。	
	専門教育科目		地域（再生）に関する専門内容	各学部の専門科目から、該当する科目を指定。	6
	履修証明書取得要件単位数				

「地域産業イノベーション学」のカリキュラムは、上記とほぼ同様であり(必要単位数はそれぞれ異なる)、「講義・体験型」のカテゴリは「地域づくりを学ぶ」「千葉を知る」「産業イノベーションを考える」「スキルを学ぶ」から成る。また、専門教育科目における指定科目は「地域産業イノベーションに関する専門内容」となる。

* 同大学の資料を基に編集部で作成

分野もまちづくり、環境、福祉など様々で、派遣先を紹介するガイダンスに参加するだけでも、地域活動の幅広さを実感できます(鈴木准教授)地域活動は50時間以上行うことになっている。認知症の予防に取り組むNPOに派遣された根本さんは、学生5人で認知症予防のための町歩

きを企画・運営し、当日の進行、事後の報告書の作成・発表も行った。「NPOの市民研究員の方が過去のイベントを例に段取りを教えてくれたので、それを基にして運動強度の異なる3つのコースを設定し、下見では休める場所や危険な場所などを入念にチェックしました。町歩きの

*1 「コミュニティ再生ケア学」は、一部科目を2014年度に開始しており、「地域再生学」は当時の科目名。現在は「地域の再生」として開講。

*2 地域住民は受講料1万円が必要。規定の回数を出席すると修了証書が授与される。



写真1 「カレッジリンク・プログラム」の「地域を元気にするアプリをつくろう」では、学生と住民がチームを組んで、アイデアを出し合い、独自のアプリを開発した。

旅程作成では旅行会社と、町歩きを記録する本作りでは印刷会社と協力したことで、多くの関係者が連携して活動を進める手法も学べました」

それらの実習科目で地域社会とのつながりができたことで、自主的な活動もしやすくなったと、根本さんは語る。

「学生1人で地域に飛び込んでいくのはハードルが高かったのですが、NPO体験などで知り合いができる」と、そうしたハードルが低くなりました。実際、私は授業で知り合った団体の活動に、授業外でも参加しました」



写真2 「地域活動体験」では、千葉県内のNPOにボランティアとして参加し、地域活動や市民団体の役割を実践的に学ぶ。実際に地域に入ることによって地域のニーズがつかめ、活動の意義も理解できる。

「コミュニティ再生ケア学」での学びを通して、専門分野に取り組む意識も変わったと、根本さんは語る。

「工学部では、新しい技術が開発され、その技術を基に製品開発を行うことが多いのですが、使う人がいてこそその製品であり、製品の使われ方や使い手のニーズを意識するようになりました」

公務員志望の大浜さんは、地域活動を行っていくために必要な精神的な強さも身につけたいと話す。

自分で職業をつくるくらいにの気概を持つ

「市役所でのインターンシップやカレッジリンクなどでは、実に様々な人たちと出会いました。人それぞれ考え方や価値観が異なるので、タフでなければ、多様な人たちと仕事はできないのだと実感しました」

学生に様々な気づきと学びをもたらしている両プログラムだが、「コミュニティ再生ケア学」の16年度の履修登録者数は100人を超えており、学生の地域への関心の高さがうかがえる。一方、「地域産業イノベーション学」の履修登録者数は16年度13人だった。設置1年目の「地域産業イノベーション学」も認知度を上げて、履修者数を増やすために今後はPR活動に力を入れていくという。

3年次終了までに各プログラムの取得要件を満たしている学生には、「取得見込み証明書」が発行され、就職活動における自己PRの材料にすることもできる。ただ、履修修了生の就職実績はまだなく、地域再生・地方創生にかかわるための社会への入り口を明確には示せていない。

「最も重要なのは、『答えがない問題に挑む』ということですよ。今後、日本が直面するのは人口の大幅な減少、超高齢社会といった初めて向き合う問題ばかりであり、誰も正解は分かりません。しかし、だからこそチャンスもあります。1つ成功すればそれが実績となり、次の展開が期待できます。学生には、問題解決につながる職業があれば、自分で職業をつくる気概で取り組んでください」と強調しています（鈴木准教授）

鈴木准教授は、建築・都市コンサルティング事務所に勤務後、地域再生に関するNPOの創立メンバーとして千葉県内の地域づくりに取り組んできた。また、東日本大震災後は東北地方でも地域づくりに携わってきた経験から、地域再生を担える人材が圧倒的に少ないと感じている。

「今後、千葉県でも大地震が起きる可能性は大いにあり、そうした時に地域に駆けつけ、まちづくりを行える人材を育てておくことは非常に重要です。両プログラムをきっかけにして、1人でも多くの学生が、地域志向のプロフェッショナルを目指すことを期待しています」（鈴木准教授）

神奈川県

生徒に主体的な学習を促して 英語4技能を育成し、 グローバル社会を生きる礎を築く

神奈川県では、県立高校改革の重点的な取組みの1つにグローバル化に対応した先進的な教育の推進を掲げ、国際感覚の涵養や英語力の育成を図るための様々な施策を打ち出した。2016年度には、英語資格・検定試験の受験費用の半額を負担する事業を実施。生徒に主体的な英語学習を促すとともに、結果分析を教師の指導改善に生かしたい考えだ。

神奈川県 Data

- ◎人口 約914万7000人 ◎面積 約2,415.81km²
- ◎高校数(本科のみ) 県立141校、市立15校、私立78校
- ◎高校生数(本科のみ) 20万6426人
- ◎電話 045-210-1111(代表)
- ◎URL <http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f6556/>

教育長の ビジョン

「スチューデント・ファースト」の視点で 子どもたちに未来を生きるための英語力を育む

神奈川県教育委員会 教育長

桐谷次郎きりたに じろう

社会・学校の環境変化を 踏まえて県立高校改革を推進

神奈川県では、2015年1月に策定した「県立高校改革基本計画」の実現に向けて、16年1月、およそ15年間の中期を展望した具体的な計画を「県立高校改革実施計画」にまとめました。これらの計画の背景には、社会の大きな変化があります。

周知の通り、グローバル化の進展により、多くのヒト・モノ・カネが国境を越えて行き来するようになりました。日本にとどまっていたとしても、グローバル化の波は避けられません。さらに、情報化もますますい勢いで進んでいます。大人だけでなく、子どももスマートフォンを持つようになり、生活の有様は大きく変わりました。また、そう遠く

い将来に、人間の仕事がコンピュータに取って代われ、相当数の職業がなくなると言われています。

加えて、日本がかつて経験したことのない人口減少も大きな要素です。本県も2018年をピークに人口が減少していくと予測され、一部の地域では既に人口減少が始まっています。本県の公立中学校の卒業生数は、1988年の12万2000人をピー

クに、現在は約7万人で、2029年には約6万2000人と、ピーク時から半減すると予測されています。生徒数が減る中、学校の活力を維持し、未来の社会を生きていく子どもたちに見合った教育を行うためにはどうすればよいのか。そのような考えの下、改革計画を立案しました。

生徒の視点に立ち 多様なニーズに応える教育を

改革のコンセプトは、「スチューデント・ファースト」です。生徒の学びと成長にとって何が必要かという視点を最優先にすることを基本的な考え方として、すべての県立高校が



きりたに・じろう 1980年神奈川県庁に入庁後、政策局政策総務部長、商工労働局長、産業労働局長を経て、2014年から教育長に。教育委員会制度の改正に伴い、16年に新制度の教育長として新たに任命された。

改革に取り組むこととしました。

改革の柱は、①質の高い教育の充実、②学校経営力の向上、③再編・統合等の取り組みです。県立高校改革という高校の再編・統合に注目が集まりますが、本県はこの3つの順番で改革を考えました。

まず、最も重視したのは教育の質を高めることです。県立高校は多様な県民のニーズに、高校教育という共通性を持ちながら応えていく使命があります。学力向上進学重点校などによってリーダー層を育てるとともに、中学校までに力を十分に発揮できなかった生徒を積極的に受け入れ、学び直しを行うクリエイティブスクール

を現在の3校から5校に拡大します。

また、全国的に見て特色ある取り組みですが、知的障がいのある生徒を県立高校で受け入れるインクルーシブ教育を進めていきます。その実践推進校を16年度は3校指定し、最終的には20校程度までに拡大する計画です。さらに、本県には約17万人の外国籍県民がいることから、外国籍の子どもが入学できる枠を持つ県立高校を9校から11校に拡大しました。

このような「スチュデント・ファースト」の教育改革を各校が行うためには、学校経営力の向上が必須ですし、学校を適正規模に保つことも重要です。再編・統合は、活力あ

る教育活動と円滑な学校経営を同時に進めるという観点で検討しました。

グローバル社会への対応はすべての生徒に必須

教育の質向上の中で重視したこと
の1つは、生徒の英語力向上の推進、及びグローバル社会に対応した先進的な教育の推進です。先ほどお話ししたように、日本人が海外に出るだけでなく、海外からも日本に来るのがグローバル社会です。特に本県では、中国や韓国、朝鮮、この十数年ではポルトガル語・スペイン語圏から来た人たちが大勢就労しています。外国籍の県民とともにくらす多文化共生の地域社会づくりを目指した取り組みが行われるなど、本県は歴史的・地勢的にも外国とは深い関係があります。そうした背景もあり、外国人と交流していくための国際感覚、コミュニケーションを図るための語学力は、すべての生徒に必要です。

改革では、グローバル教育研究推進校を原則1地域1校の計6校、国際バカロレア認定推進校は1校を指定し、指定校での成果を地域内の他校に広めるようにしました。

英語力の向上を図るためには、まずは授業が重要になります。ALLTは既に全県立高校に配置しており、今後は英語科教師の指導力向上を図るため、16年度には英語科教師の海外研修を実施します。

また、生徒の英語学習を支援するため、16年度、「英語資格検定試験活用促進支援事業」を実施しています。これは、英語資格・検定試験の受験料の半額を県が負担するという事業です。生徒に自分の英語力を客観的に把握させることで、主体的な英語学習を促したいと考えました。さらに、結果分析によって、教師の授業改善に生かすこともできます。事業では8000人分の予算を確保し、成果をしっかりと検証します。

次の時代を生きていく子どもを育てていくことが教育であり、何を教えて、何を身につけさせるかによって、次の時代が変わる可能性もあるでしょう。つまり、教師という職業は、未来をつくる素晴らしい仕事と言えます。それを心に刻んで子どもと向き合っていきたいですし、私たち県教委はそうした先生方を支える施策を実行していきたいと思っています。

県が費用を半額負担して英語資格・検定試験の受験を促し、生徒の英語力向上を効果的に図る

4技能のスコア型テストで
主体的な学習に結びつける

国際感覚の涵養と 英語力の育成を図る

神奈川県教育委員会は、生徒に身につけさせるべき力の1つにグローバル社会に対応する力を掲げ、「県立高校改革実施計画」において様々な施策を立案し、実施している(図)。高校教育課の岡野親課長は、次のように説明する。

「高校生が、高校卒業後、また大学に進学してから卒業して社会に出た後に、グローバル社会の荒波にもまれることは明白です。その時に必要な資質・能力は高校時代から育てていかないと、将来、生徒自身が厳しい状況に置かれることでしょう。そこで、高校時代には、まず海外へと視野を広げ、国際感覚を養うことが必要です。そして、海外の人たちとコミュニケーションを取るツールとして、国際共通言語としての英語の

力を育てなければならぬと考えました」

グローバル社会に対応した教育に関する研究は、グローバル教育研究推進校6校、国際バカロレア認定推進校1校を中心に進め、それら指定校での成果を県下に広めていく予定だ。

国際感覚の涵養に関して特色ある施策といえるのが、「逆さま歴史教育にかかる研究校」だ。これは、過去の出来事が現代に受け継がれている部分に焦点をあて、どのような変遷を経て今の形となったのかを学ぶという歴史教育について研究するものだ。例えば、道がカーブしているのは昔の城郭に沿ってできた道だからというように、過去と現代から社会・文化の変遷をたどり、日本の歴史について深く学ぶ。

「外国の人々と交流する時には、相手のことを理解するだけでなく、自

分たちのことも理解してもらい、相互理解が大切です。そのために、まず、自国の歴史・伝統・文化を深く知らなければならぬと考えています」(岡野課長)

英語力の育成について、神奈川県が力を入れている取り組みが、2016年度に実施している「英語資格検定試験活用促進支援事業」だ。これは、ベネッセの「GTEC for STUDENTS」(以下、GTEC)の受験費用を県が半額負担するというもので、16年度は県立高校生8000人分の予算を確保した。

図 グローバル社会への対応に関連する施策

・英語資格・検定試験の活用

生徒の英語力向上を目指して、英語資格・検定試験の受験を促進するため、必要な支援を実施し、生徒一人ひとりの英語力の定着と向上に取り組むとともに、目標達成のための検証データとして活用。

・生徒海外留学支援の実施

生徒に豊かな国際感覚と高い実践的英語力を育成するため、短期の海外留学支援を実施。

・逆さま歴史教育にかかる研究校の指定(5校)

県教育委員会が指定した学校において、指導方法を研究開発し、その成果に基づいて指導事例集を作成し、各校での活用に向けて普及。

・グローバル教育研究推進校の指定(6校)

県教育委員会が指定した学校において、グローバル人材を育成するための学習プログラム等の研究開発を実施。

・国際バカロレア認定推進校の指定(1校)

国際的に認められている大学入学試験(国際バカロレア資格)が取得可能な学校(国際バカロレア認定校)を目指す。

・英語教師の海外研修の実施

生徒の英語によるコミュニケーション能力を高めるため、国際バカロレア認定校の設置に向けて取り組む教職員を含む英語教師について、海外派遣研修等の取り組みを促進。

・外国につながる生徒への教育の機会の提供と学習支援

海外帰国生徒特別募集及び在県外国人等特別募集の実施校の拡大を図るとともに、日本語指導を始めとする学習面や、学校への適応に向けた生活面等への必要な支援を実施。

*神奈川県教育委員会の資料を基に編集部で作成



神奈川県教育委員会
教育局指導部高校教育課長
岡野 親
おかの ちかし
神奈川県教育委員会高校教育課
教育企画担当主幹、神奈川県立
横浜明朋高等学校校長等を経て現職。

この事業のねらいは主に2つある。1つめは、生徒の主體的な英語学習を促すことだ。

「英語学習で最も重要な学びの場は授業であり、日々の授業の成果は定期考査などで測れます。ただ、そこで測れるのは授業内容と直結した力です。実生活における英語力の育成を考えた時に、英語資格・検定試験を受けて客観的な結果を得ることに、生徒の自ら英語を学ぼうという意欲につながるのではないかと考えました」（岡野課長）

英語の4技能を測定できる英語資格・検定試験の中からGTECを選択した理由は、試験の結果がスコアで示されることだ。スコアであれば、高くても低くてもどこまで到達しているのかが生徒にも分かり、その後の学習の方向もつかめる。さらに、次回受験する時には、前回のスコアからの伸びが分かる。そうした達成感を得られることも、英語学習の動

機づけになると期待している。

「県の費用負担を全額ではなく、あえて半額負担としたのも、受験者も費用を負担することで、より前向きな受験につながると考えたからです」（岡野課長）

学級や学年の成績に着目し 指導改善にも生かす

2つめのねらいは、試験結果を分析し、各校の指導改善に生かすことだ。GTECでは、生徒個別の帳票だけでなく、教師用の帳票も返却される。それらの具体的なデータ分析を基にした指導改善が期待できると、岡野課長は語る。

「教師が自身の授業を客観的に振り返るのはなかなか難しいことです。から、英語資格・検定試験の結果を分析して、自身の授業の改善点を探ってほしいと思います。学級、学年、学校の成績に着目しながら、指導改善のPDCAサイクルを回していくことを期待していますし、全校長に對して行った本事業の説明会でも、指導改善のツールの1つとして活用してほしいことを強調しました」

財政担当との折衝では、この2つ

のねらいを強調して説明したという。

「本事業は、単に受験費用を負担するということではなく、その背景にはグローバル社会に対応した人材育成があり、事業のねらいは生徒の向学心と学校の教育力向上であることを重ねて強調しました」（岡野課長）

グローバル社会を生きる礎を 生徒に築く気概で取り組み

申し込みは学校単位とし、受験対象は各校に一任した。既に、学校の取り組みとして各種の英語資格・検定試験を受験している学校もあったためだ。現段階では予定人数である8000人ほどの申し込みがあった。学年は1・2年生が中心であり、3年生は1000人程度となっている。

「各校の校長からは、『スコアとして結果が生徒の手元に残るのがよい』といった声を聞いています。また、年度途中での業者決定であったため、既に学校行事が組まれていた学校もありましたが、受験日は学校が設定できるという点もよかったという声がありました」（岡野課長）

文部科学省では、高校卒業段階で英検準2級程度以上の生徒の割合が

50%以上という目標を掲げているが、神奈川県では27・8%（15年度）にとどまっている。

「検定試験で良い結果を出すことが目的ではありませんが、高いスコアを目標にすることは、生徒にとって学習に励むきっかけになるはず。そして、実際に結果が良ければ、さらに高いスコアを目指す動機づけにもなるでしょう。その延長線上で、文部科学省が設定した目標を達成できればという思いもあります」（岡野課長）

また、神奈川県では、11年度にシチズンシップ教育を始め、これまでにすべての県立高校で3回模擬投票が行われた。その結果、今年7月の参議院議員選挙では、18歳の投票率が全国でも上位という成果につながった。

「シチズンシップ教育のように、教育施策の成果が表れるまでには時間がかかります。しかし、生徒がグローバル社会の真ただ中を生きていくのは確実です。そのための礎を築くのだという意識で、先生方には改革に取り組んでほしいと思います」（岡野課長）

新テストに向けた教科を超えた話し合いが、自身の指導改善にもつながる

6月号の特集は、2つの新テストについて理解が深まる内容だった。現状把握で示されていた「『大学入学者選抜改革』」「大学入試改革」ではない」という説明が大変分かりやすかった。本特集を用いて、数年後の変化のために今からすべきことについて校内で話し合ったところ、授業スタイルの改善が急務であるという共通理解を教師間で図ることができた。特に、新テストの各教科の問題例と分析を示しつつ、具体的に求められている力の育成について教科の垣根を超え話し合ったことで、自分自身のこれからの教科指導・進路指導のさらなる改善について考えることができた。今回の特集は、今後、何度も読み返すことになりそうだ。

「広島県立広島観音高校・長光優樹」

学びは他者との関係の中で成立すると実感

6月号「実践 アクティブ・ラーニング」の記事にあった、「自分1人で分かったような気になるのではなく、誰かと相談したり、誰かに説明したりするなど、他者との関係の中で学びが成立する」という言葉に大いに共感した。私も、問題演習に取り組む生徒から、「この問題が分からないから教えてください」と声をかけられた時には、「隣のAさんに教えてもらってごらん」「Bさん、教えてあげて」などと言って、生徒同士の学びの場をつくるように心がけている。

「広島市立沼田高校・正木勝治」

Reader's VIEW

Volume 3

読者のページ

読者の先生方からのご意見を紹介します

前例踏襲ではないチャレンジが生徒の意欲向上に結びつく

6月号「指導変革の軌跡」の青森県立田名部高校が置かれている状況は、地方の公立高校に共通する課題だ。同校の「控えめな目標しか語らない生徒たち」というのも、本校とよく似ており、「推薦・AOワークシヨップ」を通して、生徒一人ひとりが志望校への意欲を高く保っている点が参考になった。また、若手教師が、新しい取り組みに積極的にチャレンジできる環境というのも素晴らしい。前例踏襲ばかりで進歩のない学校には、未来がないと思う。

「和歌山県・匿名希望」

教育委員会の支援は目指す教育を実現する上で重要

6月号の「次代の教育を形づくる教委の一手」を読み、愛媛県が目指す教育が明確にされ、その実現に向けて教育委員会が支援できている点が素晴らしいと感じた。学校を核とした地域再生が求められつつあり、今後の教育のあり方の1つの実践例となり得る取り組みであった。教育委員会の支援の下、学校・地域・企業の連携は大切だと思う。

「兵庫県・匿名希望」

教師川柳

湧き上がる夏雲のような夢を持って

福島県・臥煙

『VIEW21』高校版はウェブサイトでもご覧いただけます！

本誌の最新号、及びバックナンバーは、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトで公開しております。誌面のPDFや「改良！指導ツール ピフォーアフター」の図版もダウンロードできます。ぜひご利用ください。

詳しくは

VIEW21 高校版

検索

<http://berd.benesse.jp/magazine/kou/>



編集後記

◎今号の特集は、次期学習指導要領の柱の1つとなる「カリキュラム・マネジメント」（以下、カリ・マネ）がテーマでしたが、いかがでしたでしょうか。この時期に本テーマを取り上げたのは、次年度の教育課程の編成等にぜひお役立ていただきたいという編集部の思いからです。そのため、カリ・マネの手順や各教師の果たすべき役割、そして実践例と、カリ・マネを具体的にイメージしていただけるような誌面内容を心がけました。カリ・マネの教科書として、ご利用いただけますと幸いです。（柏木）

VIEW21 8月号 Vol.3

2016年8月22日発行

発行人 山崎昌樹
編集人 春名啓紀
発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
印刷製本 (株)協同プレス
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 中丸 満、二宮良太、長谷川敦
撮影協力 荒川 潤、小菅総一郎、田中秀和、谷口 哲、ヤマガチイキ

VIEW21編集部
〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階

©Benesse Corporation 2016

VIEW21

2016
October
10月
Volume 4

次号は
10月17日発行(予定)
『VIEW21』高校版は
年6回の発行です

COVER STORY

教師と生徒の肖像

担任であることの幸せ

表紙の学校 北海道苫小牧総合経済高校 耳浦 聡先生

耳浦聡先生が少しうれしくなるのは、ほかの先生から「D組の授業、よかったですよ」と言われた時だ。先生自身、1年次から担任を務める3年D組で英語の授業をする時、幸せな気持ちになるという。「私の問いかけに話を膨らませたり、別の視点から発言したりと、生徒から期待以上の反応を得られることがあります。そうすると、私も気持ちが乗って、想定外の活動に展開していくのです」。先生は、英語を話す楽しさを感じてほしいと考え、1年次から音読に力を入れてきた。ダイアログでは、生徒は例文にオリジナリティーを加え、会話を楽しむ。生徒の間違いを指摘するのは、ほかの生徒だ。「複数形を表すsが抜けているよ」といった指摘に、「そうだった!」と笑いながら言い直す。答えを間違えてもみんなは受け入れてくれるという安心感が、授業に活気をもたらす。

そうした温かいクラスも、1年生の頃はまとまりに欠けていた。学校祭では各部門のリーダーだけが準備に奮闘するといった事態に陥り、リーダーたちは毎日不満を漏らしに職員室に来ていた。そんな生徒の言葉を受け止めた後、耳浦先生は「必要な道具を渡して、やってほしいことを示さないと、みんなは動いてくれないのではないかな」と語りかけ、「相手に期待するばかりでなく、まず自分で工夫しないと」と続けた。リーダーたちの意識が変わり、次第に指示が伝わるようになると、クラスは動き出した。そうした経験が次の行事に生きて積み重なっていき、2年生の時には学校祭の展示部門で優勝を果たした。3年生になった今では、「D組の団結力は学校で一番」と生徒たちは胸を張る。

今日も耳浦先生の授業では、音読の声が聞こえてくる。「Are you ready?」「OK.」「Go!」。35人が一斉に話す英語を聞きながら、先生はこのクラスで授業ができる幸せをかみしめる。

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume3 2016年8月号

2016年8月22日発行/通巻第359号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
©Benesse Corporation 2016

お客様
サービスセンター

【フリーダイヤル】0120-350455

受付時間 月～金 8:00～19:00/土 8:00～17:00 (祝日・年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17